

第四章 不況と戦時下の苦境を乗り越えて

昭和元年（一九二六）から同一〇年（一九四五）まで

日中戦争に続く太平洋戦争は、学校教育にも大きな影響を与えた。昭和十六年十二月に始まった繰り上げ卒業。在校生も勤労奉仕から勤労働員へと駆り出された。さらに校内教育も軍事一色になった。中でも「査閲」は年間軍事教練の総決算とでもいうべきもので最も厳しく、査閲官を前に生徒も職員も実戦さながらの緊迫した訓練を行った。写真は戦闘教練の一場面である。

写真 有賀 宏（42回）所蔵



はじめに

初代松田力熊校長、二代江畑猷之允校長をはじめとする優れた先生方の努力により、木曾山林学校建学の基礎が定まり、県下各地はもとより全国から俊英相集い、林業専門学校としての校名が全国的に定着してきた明治・大正期を受けて、時代は昭和に入った。

昭和に入ると同時に金融恐慌、世界大恐慌と相次いだ経済不況は、本校にも早くから大きな影響を与え、昭和二年（一九二七）の生徒募集は一学級減とせざるを得ない状況に追い込まれた。さらに六年の満州事変から二十年の太平洋戦争終結までの十五年戦争は、一層国民生活を極度に圧迫し、まさに辛く暗黒の時代であった。

しかし、この苦境下ではあったが、四年には木工専修科の開設にこぎつけた。また次第に強まる戦時体制下で、木材の需要増加と林業技術者の不足から、十四年に本校は再び一学級増とし、かつ十九年には短期養成コースである長野県林業技術員養成所を併設するに至るなど、本校の地道な努力は粘り強く続けられた。こうして多くの若者が本校に集まり、寄宿舎には常時一〇〇名前後の生徒が在籍するなど、本校の教育活動は益々盛んになった。

校友会は県下の各種競技会に出場し優れた成績を残した。学

業面において高等専門学校レベルの林業・林学をみっちり勉強した卒業生は、県内はもとより全国各地の林業関係官公庁等に就職、即戦力として多大なる成果を挙げた。また遠く樺太、台湾、朝鮮、満州などの海外にも進出、山林健児ここにありの名声を高め、後輩達に大きな刺激を与えた。

しかし、長引く戦争は国家総動員体制を強めた。学校教育も例外でなく、軍事教練の強化、相次ぐ勤労働員、繰上げ卒業、あるいは学徒出陣と戦争一色となり、もはや正常な教育活動は望むべくもない状況になった。

昭和十八、九年と二年続いた北海道への援農派遣、二十年の敗戦まで続いた発電所や御料林への勤労奉仕などは、その最たるものであった。

本章では、こうした激動の時代を背景に、次第に正常な教育活動ができなくなる状況下で本校や生徒達はどのように活動したか、時を追って述べることにした。

尚、付記すれば十八年頃より戦後間もない頃の記録が本校には、ほとんど残されていない。これは戦時中の紙不足、統制、終戦直後の焼却処分、三九年の事務倉庫（旧寄宿舎）の火災などによるものと思われる。

第一節 世界恐慌と第二次世界大戦

一、経済不況と戦争への道

「富国強兵・殖産興業」を旗印に、列強に追いつくべく躍進を遂げた明治・大正時代も、昭和に入ると経済不況、相つぐ戦争により、国民生活は一転して暗く悲しいものにならわっていく。主な出来事を年代をおって挙げてみると次のようである。

生徒募集困難から学級減へ

大正十二年（一九二二）九月、関東大震災発生。東京を中心に大被害を受け、昭和の暗い歴史を暗示するかのようであった。続く昭和にかけての経済不況は、教育界にも大きな影響を与え、生徒募集に困難をきたした本校は、昭和二年（一九二七）に、それまでの二学級募集から一学級への学級減を余儀なくされた。

同年は、昭和時代の幕開けの年であり、それは金融恐慌（三月）で始まった。取り付け騒ぎの混乱の中で休業に追い込まれる銀行が続出したため、企業倒産が相次ぎ、一方農村では鹵佃の大暴落により、県下十六万戸の養蚕農家は甚大な被害を受けた。また五月十二日に起こった福島町の火災は、町の中心部を焼失する大惨事になった。

世界恐慌と農村の疲弊

四年一〇月、ニューヨークの株式市場で株価が大暴落し、史上未曾有の世界恐慌に突入した。これ以後およそ四年間続く経済不況は、我が国の進路を大きく転換させることになる。

同五年、長野県の輸出の大半を占めていた生糸価格が大暴落。製糸業界や銀行の倒産休業相次ぎ、労働争議も激化した。春まゆの価格が六分の一になり、養蚕農家は壊滅状態になった。さらに農産物価格も暴落し、米価は生産費を下まわり、林業収入も木材がマイナス五〇パーセント、木炭も同六〇パーセントになった。農家の負債が増加する中、六年から翌年にかけて凶作が続いた。八年は豊作であったが翌九年は未曾有の大凶作で農村は混乱し、東北地方では娘の身売りが激増する惨状を呈し、小作争議も激化した。こうした中で学校を卒業しても就職できないものが多く、本校でも未就職率五〇パーセントにのぼった年もあった。

昭和七年（一九三二）、政府は「自力更生」のスローガンを示して農山漁村の経済更生運動を始めた。長野県でも、同一〇年経済更生計画を立て、耕地拡張、林道開発、負債の整理等の事業を推進した。政府はまた農村過剰人口の解消と負債整理をねらって満州移民を奨励した。疲弊していた農村の人々は「王道楽土の建設」を夢みて続々と大陸へ渡った。県下から送り出された人々は約三万人にもものぼったが、敗戦でおよそ半数の人々が大陸に散った。これは全国一の犠牲者数である。

それらに先立つ昭和三年八月、日本を含む十五カ国がパリ不戦条約に調印、さらに五年一〇月にはロンドン軍縮条約が批准された。

日中戦争から太平洋戦争へ

ところが六年九月、満州事変がおこった。国民の誰もが夢にも思わなかった戦いで、二〇年の敗戦まで続く十五年戦争の幕開けでもあった。七年、満州国の建国が宣言された。世界各国はこれを認めず、翌年三月、我が国は国際連盟を脱退。政府は非常時の名のもとに言論、思想、教育などの統制を強め国防国家実現へと向かっていった。

昭和十一年（一九三六）、ロンドン軍縮会議を脱退した我が国は、二・二六事件を契機に軍部が政治に対する発言力を強めて、軍備大拡張を始めると共に、国内すべての産業界へもその力は及び、戦時体制整備が強力に推進された。そして十二年七月、盧溝橋事件を口実に、我が国は中国との全面戦争に突入した。

日中戦争は満州事変とは比較にならない大戦争となった。当初は短期間に終息させる見込みであったこの戦争も、中国側の強い抵抗にあい予想もしない長期戦となって、我が国の被害は大きくなった。太平洋戦争が始まるまでに、既に十八万五千余名の戦死者を出し、また戦費も三百億円近くにのぼって国民生活が大きく圧迫した。この間政府は「国民精神総動員運動」を

始め、挙国一致、堅忍持久等のスローガンのもとに、節約、貯蓄、勤労奉仕、生活改善を呼びかけた。また興亜奉公日を設けて、日の丸弁当を強いたり、国民服やモンペ姿の制服を押しつけるなど、「ぜいたくは敵だ」と国民生活の統制に力を入れた。十三年四月には、国家総動員法が公布され、戦時体制の根幹が固まった。

十五年九月、日独伊三国軍事同盟成立。これにより日米関係は一層悪化し、遂に十六年十二月八日、太平洋戦争に突入した。米英との戦争が始まると、学校教育も戦時一色となり、軍事教練の強化、勤労動員の長期化など、戦争の影が暗く重くのしかかってくる。本校もその例外ではありえなかった。

二、戦時体制下の林業政策と林業界

不況と機械化

昭和五年（一九三〇）から六年へと、不況が一層深刻化する中、失業救済、農山漁村救済のため、林道開設に国庫補助や融資による助成策が打ち出された。一方この分野での技術革新が進み、国産初のガソリンエンジン集材機、木曾型集材機が製作されて木材の集材に活躍するようになった。この頃から木曾御料林ではヒノキ択伐作業が開始され、S字曲線の集材が実行に移された。一方国有林では簡易製材機が考案され地元で貸付けが行われた。

昭和十一年には、森林治水事業奨励規則が公布され、荒廢林地の復旧に国が助成することになり、国有林においても砂防工事開始された。パルプの原料として松材の集荷を全国的に行うようになったのもこの頃である。

十二年七月には日中戦争が始まったが、それより先、四月第二期森林治水事業がスタートして災害防止施設への助成、国営荒廢林地の復旧、水害防備林造成が進められた。また、森林火災国営保険法も、三月公布され、貴重な森林資源の保全が図られた。

戦争と増伐と統制

しかし戦時色は濃くなり、十三年には国家総動員法が公布され、国有林では軍需用材の増伐が進められた。翌十四年には、生松脂採取、用材生産統制規則、木炭配給統制（県外移出禁止）などの措置がとられた。さらに増伐による森林資源の減少に対処すべく、林業種苗法が公布され優良種苗を育成することとなった。

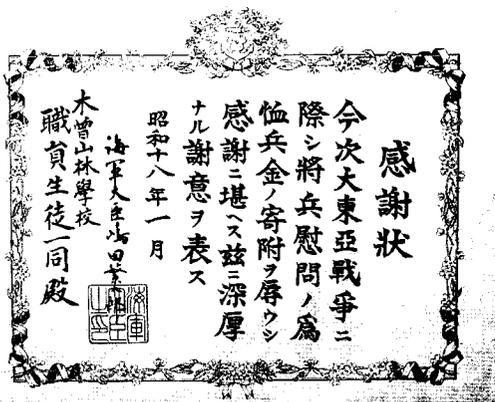
昭和十六年三月、木材統制法が公布されて、全国の木材会社は、日本木材会社、地方木材会社に一元統制され、立木の強制伐採命令、木材業、製材業の自由営業停止や木炭の配給制が敷かれた。

戦争が熾烈になった十八年、生産増強勤労緊急対策要綱にもとづく木造船建造緊急方策要綱の決定。軍需造船供木運動も始

まって、この年木材の伐採量は戦前のピーク、即ち一億八〇〇万立方メートルに達した。

戦争が終りに近い十九年には、戦争用材確保のため兵力による木材伐採。航空機用ブナ材確保のための奥地林道開設の全額補助。この外に民有林の非常伐採計画樹立。民有林の不採算林分を国が買い上げ、官行による伐採が開始された。

このような木材需要の急増に応じて、この時期、開校以来生徒達により営々と植林され、保育されてきた本校演習林の林木もかなり伐採された。また林業技術者の不足も深刻となり、十四年、本校の募集人員も一学年一〇〇人（二学級）にもどり、



写4-1 海軍大臣嶋田繁太郎より本校への感謝状

さらに十九年四月、本校に長野県林業技術員養成所が併設（二十年五月廃止）された。

三、戦時体制下と教育の統制

言論・思想・教育の統制強化

満州事変が起こった翌昭和七年（一九三二）六月、警視庁に特別高等警察部（特高）が設けられ、言論、思想、教育の統制が強化された。八年、長野県小学校教員の赤化事件が県内をゆさぶった。九年、文部省に思想局が設けられ、全国の学校に、国体明徴を訓令し、天皇や神国日本を前面に立てて思想統制を推進した。

十二年、日中戦争突入と共に日本は戦時体制に入った。すでに大正十四年には軍事教練施行案が決められ、陸軍現役将校の学校配属令が公布されていた。以来実業学校を含む中等学校では組織的軍事教練が実施され、銃器庫には三八式歩兵銃を中心に小銃や軽機関銃などが配備された。

十四年二月、国民精神発揚週間が始まった。五月には東京で全国学生生徒親閲式が行われ、本校職員二名、生徒代表一〇名を含む、全国千八百校の代表三万余名が武装して天皇の前を分列行進した。九月には、興亜奉公日が設定され、翌十五年から外国風カタカナ語の追放まで行われた。

学校の終息

十六年八月、文部省は中等学校以上の学校に、学校報国団（隊）の編成を指令した。本校の校友会も報国団及び報国隊に変わった。十月、大学・専門学校・実業学校などの修業年限短縮勅令により、三年生は十二月に卒業することになった。本校でも十二月二七日第三九回卒業式を挙行了。また昭和十三年から始まった生徒の勤労奉仕は日常化し、十八年の戦時動員体制により、生徒は一年のうち四ヶ月動員されることになり、二年生は、北海道へ援農派遣をさせられた。太平洋戦争の戦域が拡大し、戦況が苛烈になるにつれて教職員の応召、出征が相次ぎ、さらに学業半ばの生徒が戦陣に出動した。特に海軍飛行予科練習生として入隊する生徒が次々と学び舎を後にした。教室は鹵の抜けたような状態に変わっていった。これは激動の昭和前期の教室で、最も悲しく忘れられない光景であった。

さらに十九年には軍事教育全面強化の発令。食糧増産に生徒五〇〇万人動員の発令など、正常な学校教育は極めて困難になった。翌二〇年三月には学校の授業停止が指令されて、生産分野への学徒動員が始まり、学校は終息した。

第二節 苦境と新たな活動

一、卒業生の進路状況

1、あこがれの帝室林野局

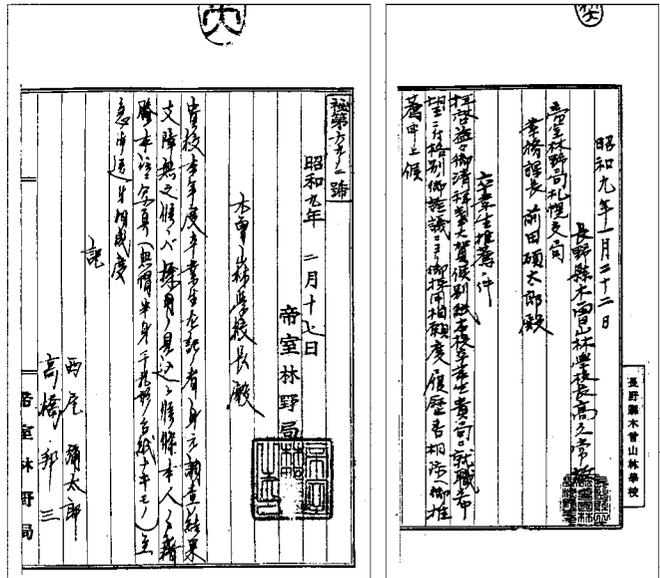
山林学校の生徒のみならず、木曾谷住民のあこがれに、帝室林野局への就職があった。福島町の一角にそびえ立つ白亜の殿堂、帝室林野局木曾支局とその下方に広がる官舎群を「御料」「御料官舎」と呼んで、雲の上のようなあこがれの存在であった。本校を卒業して正規採用となれば、即幹部候補生で、衆目の集まる場所であったが、毎年少人数（二〜三人）採用の難関であった。

昭和の初期は、明治・大正の伝統を引き継いで、国有林野等の分野、林業関係会社等への就職は、国内全域はもとより、朝鮮・樺太・台湾・満州へも幅広く進出した。この伝統は戦後も続き、例えば、国有林野への就職は長野はもちろん北海道をはじめ青森・秋田・前橋・東京・名古屋・大阪等の各営林局へ続々と進出し、各地に蘇門の地盤を固めた。

2、不況による自宅待機

第一次世界大戦景気の当時、中等学校の卒業生は社会全体からみて希少であり、本校は引く手あまたであったが、長引く不況や恐慌の波の中で、就職は容易でなく、卒業しても止むを得ず自宅待機をした者が驚く程多数にのぼった。

昭和六年（一九三一）五月卒業生の自宅待機は五〇パーセントに達した。（図4-1-1）自宅待機者は新規就職者に比べて不



写4-2 本校から帝室林野局へ出した卒業生推薦状（右）と採用内定通知（左）

図4-1 昭和の不況時における卒業生の進路状況

年	昭和	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	自宅待機と思われる者 (%)	33	35	21	40	50	42	40	8	10
営林局署関係 (%)	20	14	8	19	16	10	12	8	5	
林業関係会社 (%)	11	6	—	2	4	8	2	16	18	
県庁関係 (%)	2	2	4	—	—	18	14	18	13	
帝室林野局 正規 (%) (臨時)	2	2 (20)	4 (19)	5 (17)	4 (12)	5 (5)	5 (5)	5 (5)	5 (16)	
進学 (%)	2	8	2	5	2	3	—	3	—	
その他*	30	15	46	17	16	14	27	42	38	
卒業生数	45名	49名	47名	42名	49名	40名	42名	38名	38名	

※上記関係以外の就職者 (%)

(各年度の「蘇門会報」より作成)

利な面が多かったと推測され、進路指導も大変だったと思われる。しかし九年を境に状況が好転し、十一年の卒業生は自営二名を除き、自宅待機はゼロとなっている。

昭和四年（一九二九）新設の木工専修科卒業生は、木工関係に就く者が圧倒的に多かった。しかし不況下では、個人経営から都市の木工会社へ移っていく傾向が強まった。

3、分野別就職者数

本校創立以来、昭和十三年（一九三八）十二月までの卒業生の進路状況は次のようである。

卒業生総数 一、三五〇名

(内訳) 帝室林野局 一六〇名 営林局署 一五一名

道府県庁 一九五名 市町村吏員 四五名

海外官庁 七一名 その他官庁 二〇名

教職員 四〇名 民間会社 一四五名

上級学校 一〇名 兵役 二五名

医師・僧侶 二五名 自宅実業従事 三〇三名

死亡 一六〇名

昭和十三年三月の卒業生の進路状況

卒業生 四八名 内 就職希望 四三名 同決定 四三名

(内訳) 帝室林野局 三名 東京営林局 二名

北海道庁 四名 岐阜県山林部 一名

満州国 四名 朝鮮官庁 七名

三井物産 三名 王子製紙 十一名

鉄道省 一名 大林組 二名

住友合資山林部 一名 秋田木材 一名

日立製作所山林部 一名 東京中央工業 一名

台湾日東拓殖農林 一名

(求人を充しきれなかったもの)

朝鮮関係官庁・会社 二三名

満州国 〃 〃 九名

台湾 〃 〃 六名

国内 官庁 十六名

国内 会社 一〇名

県内町村 五名

初任給待遇(昭和十三年三月卒業生)

図4-2

任地	月額	旅費手当月額
内地・北海道	三〇〇～三五円	十五～二〇円
台湾	四〇円	二〇円
朝鮮・樺太	四五円	二〇円
満州	七〇円	三〇～六〇円*

*本年最高二二八円
『蘇門会報』一八一号

二、木工専修科の設置

1、設置の目的

昭和四年(一九二九)四月、本校に木工専修科が設置された。

初代松田力熊校長は、その教育方針の中で「林産物に関係する地方特殊の工業、若しくは将来有望なところの工業の種類を選び、森林学校に開設することは極めて重要なことである」と述べた。この松田校長の構想が二十数年を経て実現をみたのである。

それは経済恐慌の激しい荒波を乗り切る手段として、木材の付加価値を高める産業の育成が、木曾谷にとっても重要な案件であった。ともあれ当時日本でも有数の林業学校である本校に、将来の木材加工方面の人材育成を目的に木工専修科が設置されたことは、県をはじめ学校、地域社会としても大いに意義のあることであった。

2、募集人員と修業年限

募集人員 三〇名
修業年数 一年

但し卒業後は、本人の希望により研修生として、さらに一年、学校に残ることができた。

3、学習内容・活動

技術修得に主体をおくため、実習時間を多く設け一日三時間は実習に当てられた。主な学習科目は、修身(校長訓話)、国

語、英語、木工材料、木材工作、製図、体育、教練、その他であった。また部活動も、陸上部、剣道部、柔道部、弓道部、庭球部等、各人が希望の部に入部して活動した。

4、実習作品展

専修科一ヶ年間の実習による作品の多くは家具類であり、一年生の作品は比較的小品が多く、本立、小箱、整理小ダンス、



写4-3 第1回の作品即売展覧会 (宗田尚久・木1回・蔵)

花台等々であり、二年目の研修生の作品は、書棚、整理ダンス、文机、椅子、応接セットなど大物が多く、毎年一回、福島町で展示即売を行い、好評であった。

当時の信毎記事によると、「木曾山林学校木工科製作品即売展覧会等何れも人気を呼び殊に山林学校の木工品即売会の出品物数百点に対し午前十時頃までに全部売約済みとなったやうな有様であった」のように記されている。

5、実習に関係した施設・設備

組立工場 (普通実習室)

座式工作台 (三〇台)・立式工作台 (二二台)・研磨場・グ

ラインダー・砥石等

機械工場 (機械実習室)

丸のこ盤 (一台)・帯のこ盤 (一台)・手押鉋盤 (一台)

足ぶみ式ミシン鋸盤 (二台)・ろくろ台 (二台)

その他研磨機等 (三台)・塗装室・塗装用具・塗料・

その他

木工専修科の施設として、寄宿舎南棟一階が転用された。当時は不況のあおりを受けて、林業科一学級減となり、舎生も大きく減少していた。財政不如意と相まって寄宿舎を一部転用したことは止むを得ないところであったと思われるが、特に寄宿舎出身の卒業生からは、それを嘆く声が発せられた。

6、木工専修科のその後

木工専修科は昭和五年三月第一回卒業生二十七名を社会に送り出した（ただし二十七名中七名は研修生として残留）。不況時の最中であり、就職状況は必ずしも良好とは言えず、それでも学校側の配慮により家具業界をはじめ、その他の木工業界に就職できた。同年四月、第二回生十七名を迎えたが、入学生が減り将来に向けて一抹の不安を残した。この頃からは実習工場の機械も一通り整備されていたが、一学年十七名は寂しい限りであつた。さらに翌六年四月の入学生は十三名となり、七年は十一名に減少、八年度入学生に至つては四名となり、昭和九年三月木工専修科は、設置後わずか五回の卒業生（七十二名）を出したのみで遂に廃科されることになつた。

図4-3 木工専修科入学生の推移

昭和四年	五年	六年	七年	八年	計
二十七人	十七人	十三人	十一人	四人	七十二人

当時、木材加工方面の人材育成を目的とし、地域社会や学校に期待されて木工専修科が設置されたが、わずか五年間で廃止の運命に追い込まれてしまった。その主な原因としては、先ず当時の極めて深刻な不況があげられる。さらに、修業年限一年では、あまりに短期間すぎて、学習範囲も特定の科目に限られ、

実習や部活動等においても総てが中途半端に終り、生徒を充分満足させるものではなかつた。このことは卒業資格にもつながり、三年修業の林業科とは異なり、木工専修科卒は実業学校卒業とはならなかつたのである。

こうして不況を背景に、充分な魅力を欠いた専修科は生徒の減少につながり、廃科された。

しかし、この木工分野の教育は、本校に大きな種を播いた。まず廃科により残された木工実習関係の諸設備は、林業科の生徒の実習に生かされ、林業教育の幅を広げた。そして終戦直後の我が国未曾有の大混乱、窮乏の時に、わずか一年ほどの間に、三年制の木材工芸科（現、インテリア科）の設置を可能にしたのは、この木工専修科があつたからに他ならない。

三、待望の学級増加

不況の影響を受けて昭和二年（一九二七）一学級減にされた本校も、十年余りの歳月を経て昭和十四年、再び二学級にもどつた。『蘇門会報』に「待望。母校躍進！学級増加が実現す」のタイトルのもと、次のような喜びの記事が載っている。

今や事変を機として林業の重要性愈々加はり、有能の士を求むること愈々急であります。この秋に至り母校最近の入学志願者は頓に増加し、一方卒業生に対する需要は激増して、為に全

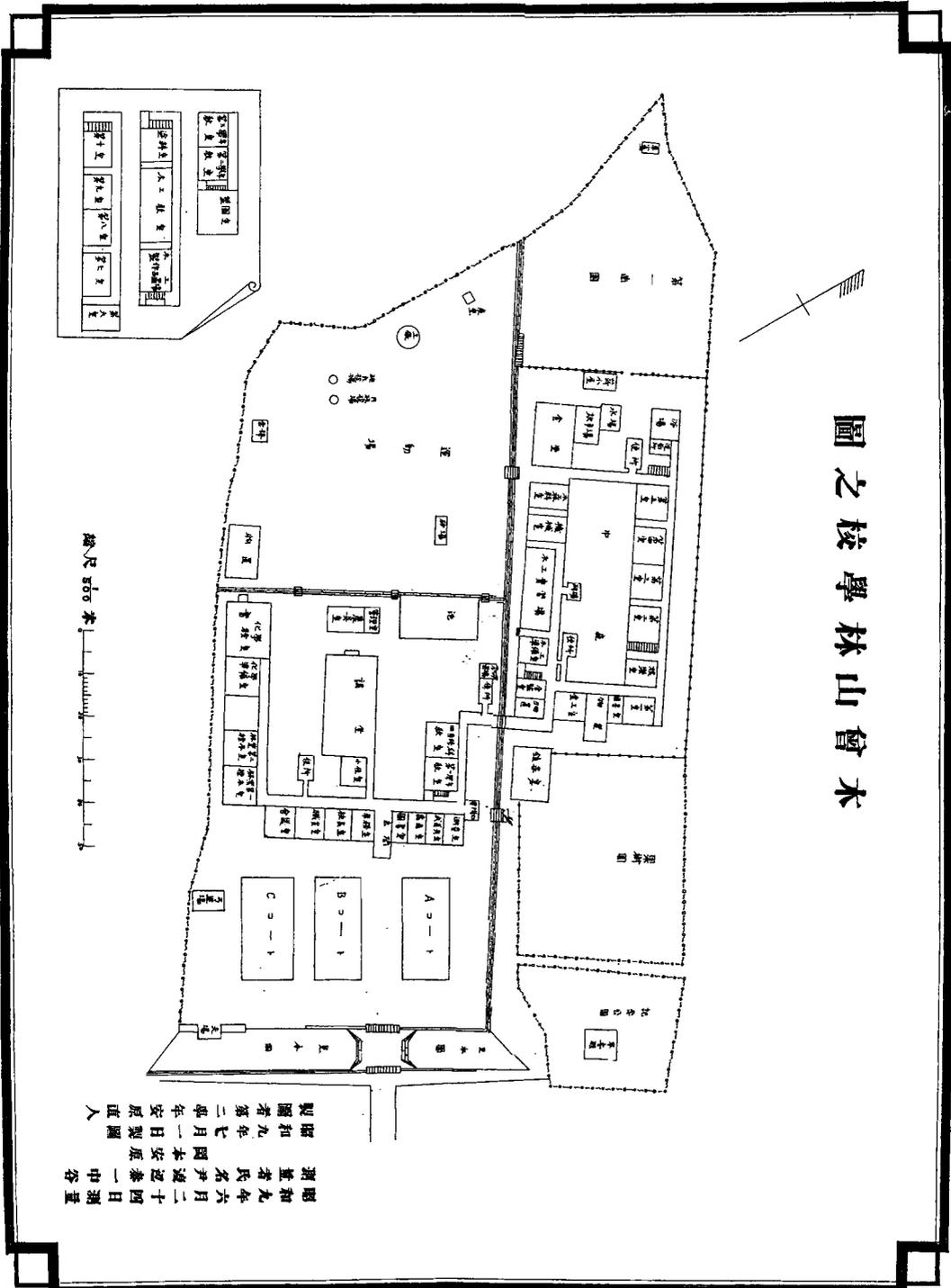


図4-4 当時の生徒による校舎測量図（2年安原直人・33回・安原勘吾氏提供）

需員数の半ばをも満たし得ざる現況にありますのは同慶の至りであります。依つて来春を期して学級の増加を要請中でありますところ、愈々実施のことに決定いたしました。

『蘇門会報』一八一号(昭13年)

この背景には、満州、朝鮮における林業開発に伴う、伐木・造林事業の拡張。パルプ生産の増加により、その資材に関する技術者の不足。木材工業関係会社や官庁の求人増加などがあり、そのことを前述の進路状況がよく示している。また就職の好転は当然志願者の増加をみて一学級増となり、昭和元年以前の学級編制にもどつたのである。

四、演習林と苗圃

1、演習林

①面積

面積は創立当初から増減はなかった。台帳上、八三町七畝二十歩で、実測では六七ヘクタール余り。二団地(裏山、大平山)となつている。

②樹種

昭和九年(一九三四)、重本勝教諭が発表した「裏山演習林樹木目録」(『蘇門会報』第一七六号)によると、総数五〇科、一〇五属、一九三種(変種を含む)とし、次のように分類した。

針葉樹として、いちい科、いぬがや科、まつ科、すぎ科、ひのき科の五科。闊葉樹として、やなぎ科、くるみ科、ぶなのき科、かばのき科、にれ科、くは科、ふさぎくら科、びやくだん科、かつら科、あけび科、めぎ科、もくれん科、くすのき科、ゆきのした科、まんさく科、まめ科等々、四五科目を数えている。

③造林樹種

造林樹種として主なものは、ヒノキ、カラマツ、アカマツ、サワラ、スギ、クリ、クヌギがあげられる。

④林木の状況(昭和一〇年)

代表的なものとして、岩ヶ沢のひのき林は二八年生で、大きなものは胸高直径二〇センチ、樹高十八メートルに達し、演習林第一の美林であり、次いで二林班のスギ、七林班のカラマツ、八林班(大平山)のカラマツ林があげられる。また二林班のス

図4-5 挿木試験成績結果（昭和11年）
神庭英教諭

	挿付本数	11月現在活着本数	活着率
すぎ直挿	225本	210本	93%
すぎ床挿	225本	216本	96%
ひのき床挿	89本	32本	36%
さはら床挿	89本	65本	73%
かうやまき床挿	89本	31本	35%
ねずこ床挿	89本	70本	79%
ひば床挿	89本	51本	57%

ギ林は、明治三五年五月の植栽で、大きなものは直径二〇センチ、樹高二十メートルに達している。御大典記念事業として七林班に植林されたサクラは、ソメイヨシノ、ヤエザクラの二種で、昭和四年に三百本、六年に二百本が植えられ、五メートル内外に成長している。

⑤その他

山葵（わさび）栽培 昭和五年より三尾貫三（12回）の畑で、二年間試み、以後姥ヶ沢で栽培しているが、しばしば洪水の害をうけていまだ収穫に至っていない。（昭和一〇年）

林間苗圃 六林班のアカ

マツ林に九〇平方メートルばかりの苗床を設定し、アカマツ補植用苗を育成し、良好な成績を上げている。

椎茸栽培 昭和九年より

六林班内に栽培場を設定して栽培している。

挿木 二本杉において大

正十五年より開始している。木曾五木をはじめ

図4-6 松脂採集量

採集木番号	地上1.5mにおける周囲	105日間に おける採集量	月別一回平均採集量			
			6月	7月	8月	9月
1	83.0 cm	900.00 g	22.50 ^g	22.50 ^g	22.15 ^g	24.88 ^g
2	80.0	1,083.75	18.00	21.87	34.77	31.70
3	77.0	858.75	11.25	23.12	23.02	24.50
4	66.0	341.25	9.75	6.56	12.72	9.20
5	76.0	731.25	15.75	14.06	17.38	26.59
6	68.5	330.00	6.00	9.08	6.81	10.54
7	75.7	716.25	4.50	21.87	25.90	13.29
8	73.0	731.25	13.50	20.62	24.20	13.63
9	78.0	450.00	14.25	10.62	8.86	13.97
10	73.5	756.50	9.00	17.50	30.25	15.34

め、スギの直挿をおこなっているが成績良好である。昭和十一年、神庭英教諭の発表した挿木試験成績によると（図4-5）のようである。

接木 昭和一〇年、苗圃で試みたが、台木不良で良い結果が得られず、今後とも研究し技術を習得すべきものである、としている。



写4-4 林業実習(昭17年)神庭教諭(左端)から松脂採取の指導を受ける生徒達(40回)

間伐木 最近の間伐成績は次の通りである。

昭和八年 ヒノキ間伐 二三・九七 立方メートル

昭和九年 カラマツ間伐 二六・七三 立方メートル

昭和十年 カラマツ間伐 六五・八五 立方メートル

松脂採集 昭和十四年、神庭教諭の発表した松脂採集実習の一

部概要は次のようである。

裏山演習林で六月十七日から九月二十九日までの一〇五日間、三年生が松脂採集を行なった。

・採集林 東北に面した二七年生の赤松林

・採集法 斜溝式

・切付 隔日切付

実習概要を見ると、松脂採集をしても生長量を著しく減ずるものでないことや、採集量は高温多湿の場合には多いことなどを挙げ、この事業が明治十八、九年頃から行われているのに、一向に発達しなかった原因として、採集法の幼稚、精製法の不適当さ等もさることながら、根気の欠乏が最大の原因ではないだろうかと、神庭教諭は述べている。

2、苗圃(昭和八年の現況)

大正時代、苗圃は校舎裏の運動場で、寄宿舎側には桜の大木が枝を張っていたという。昭和に入り苗圃は運動場になったために追われ五カ所に分散した。第一苗圃は寄宿舎炊事場の裏、第二、三、五苗圃は校門を出て右手に並ぶ。第四苗圃は記念公園と果樹園の間を通過して約二〇〇メートル登った所にそれぞれあった。五カ所の苗圃合計面積は約五〇アールで、ここから山出苗を毎年約四万本生産し、約百円の収入をあげた。昭和八年現在、あかまつを筆頭に三十余種、二十万本の苗木を養成していた。

播種地 五アール

図4-7

あかまつ	十萬本	はげしぱり	三百本
ひのき	七千本	いちい	二百本
すぎ	三千本	きささげ	二百本
さはら	一千本	いてふ	二百本
くろまつ	一千本	きはだ	二百本
くぬぎ	一千本	かしぐるみ	百本
からまつ	二千本	くり	百本

その他百本未満のもの—なんてん、しゅろ、しらかし、から
たち、てうせんまつ、こうやまき、えんぴつびやくしん。

床替地 四四アール

あかまつ	一回床替	五萬本	二回床替	一万五千本
ひのき	一回床替	七千本	二回床替	一万五千本
くぬぎ	〃	一千本	三回〃	三千本
からまつ	〃	二千本	二回〃	五百本
すぎ	〃	二千本		
こうやまき	〃	三百本		
ひば	〃	八百本		
いちい	〃	四百本		
もみ	〃	三百本		
はげしぱり	〃	百本		

てうせんまつ 二回床替 二百本

このてがしは 〃 五百本

いてふ 一回床替 二百本

その他 かしぐるみ 二年生

きはだ 三年生

ねむのき 二年生

さはら 三年生

挿木床 ○・三アール

すぎ 五百本 木曾五木 各五十本

五、実習

1、演習林と苗圃

①実習の心得

演習林と苗圃の経営は、本校の極めて重要な教育分野であり、毎年春を迎えるとともに、苗木の床替、山出苗の掘取仮植、未造林地への植栽、植栽地の補植等に始まり、下刈り、除伐、枝打ち、間伐、更には燃料採取に至るまで、全校で春季、夏季、秋季の各実習において徹底して行なわれた。その他に農園の経営も行われていたので、生徒の実習は多岐にわたった。生徒は学校で定めた実習日誌を必携し、実習日時、指導教師、天候、

気温、作業種類、方法、作業時間、工程、観察及び感想を毎回記入し、これを定期的に提出し評価を受けた。実習日誌には、「実習の心得」として次の項目を挙げている。

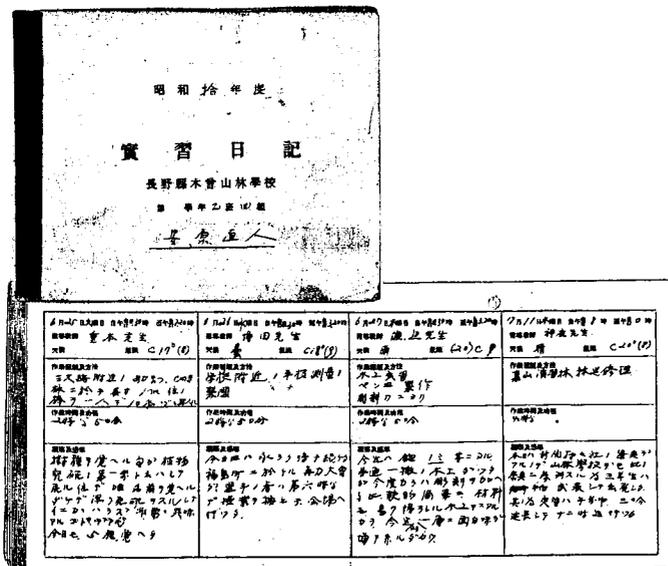
- ・実習ハ技術ノ習得ニ勉ムルト共ニ勤勞、努力、忍耐、精神作興等人物ノ錬成ヲ怠ラザルコト。
- ・常ニ周密ナル觀察ト研究心ヲ以テ從事スルコト。
- ・各自責任ヲ以テ作業スルト共ニ、協力シテ能率ヲ増進スルコト。
- ・立木、作物等ニ対シテハ常ニ愛護ノ念ヲ以テ接スルコト。
- ・器具、機械等ハ丁寧ニ取扱ヒ、肥料、薬剤其ノ他ノ材料ヲ濫費セザルコト。

② 実習日記

実習には、常に実習服で身を固め鉈を腰に帯びた山林独特のスタイルで従事した。昭和十七年、第二学年春季実習の一部を古川彦次（41回）の『実習日記』より揚げると次のようである。

- 四月 二日（木） 講堂手入れ、清掃（新しく張替えた床板を藁で研ぎ塗油）
- 六日（月） 苗木掘取り、仮植
- 七日（火）

- 八日（水） 農園耕起
- 九日（木） 苗木仮植 床作り
- 十一日（土） アカマツ苗木替
- 十三日（月）
- 十四日（火）
- 十五日（水）
- 十六日（木） 農園にバレイシヨ播付、水田耕起



写4-5 昭和10年の「実習日記」（前掲安原氏提供）

十七日(金)	アカマツ床替	〃
十八日(土)	アカマツ、カラマツ補植	半日
二十日(月)	〃	〃
二十三日(木)	新農園の桑の抜根	終日
二十四日(金)	〃	〃

この他に勤労奉仕等もあり、年間授業時数の中で実習の占める割合は濃密なものであった。また、春の一年生の実習は、初日は演習林の見学であり、翌日からはクラスを一〇班に分けた班別編成となって班単位で実習に従事した。特に春季実習には三年生が各班に一名付添って直接指導したが、これらの慣行は戦後も引続いて行われた。

③ 測量実習

前述のように「カラスの鳴かぬ日はあっても山林生の測量をやらぬ日はない」、地元ではこんな評判も出る程実習が行われた。しかし生徒の方は「測量とは誤差なり」と随分悩まされたものだった。一般の林業実習は演習林や苗圃が教場となるのに比べ、測量実習は、演習林をはじめとして種目によっては福島町の中心まで出て、技術が身につくまで繰り返し、「免諒限界」(許容限界)なる語が忘れられぬものとなった。

測量実習は初めは、測鎖、間縄などの測距から入り、見取り

測量、平板測量、コンパス測量、水準測量、トランシット測量へ、さらに路線測量、三角測量等へと発展した。当時は、水準儀(レベル)、転鏡儀(トランシット)などは、珍しい器械だったので、実習姿に地元の人々も好奇の目を向けた。

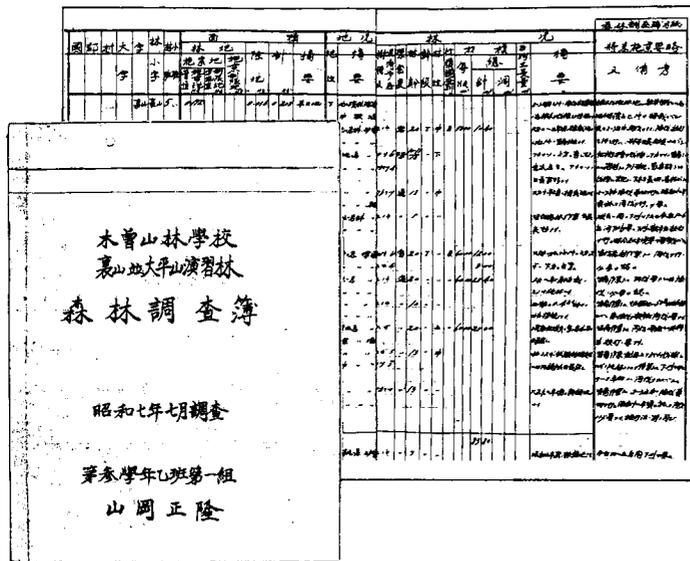
測量と表裏をなすのが製図であった。製図も基礎から学んだ。烏口^{からすぐち}で、実線、破線、鎖線等々を引き、明朝体の文字や図面の輪郭等を経てさまざまな課題をこなした。テストの近づくと製図の課題に追われた冬の夜、烏口の墨が凍って線が途切れるなどの経験は、誰もが持ったものであった。

御料木曾支局に測量の大家がいて三角測量などの特別講義と実習指導をしていたこともあった。

本校が斯界で高い評価を維持してきたのも、実習を重視した教育の賜物と言えよう。(図4-4参照)



写4-6 増田篤志教諭の指導によるトランシット測量実習風景(大平山演習林にて 山下忠作・27回・蔵)



写4-7 裏山演習林調査簿 (一部・本校所蔵)

④ 森林調査簿・森林基本図・林相図の作成

森林の状況を正確に把握するための実習に、「森林調査簿」の作成があつた。測量、地質、樹種、林齢、材積等々の詳細な調査をもとに作成され、「森林基本図」及び「林相図」(グラビページ)と合せて毎年必ず三年生に課せられるものであつた。従つて三年間の実習の総まとめのような性格をもち、極めて高

いレベルの裏山演習林調査簿が生徒によつて作成された。

これも本校における実習の大きな成果である。(ここでは、その一部を載せた。後掲、部門・資料編参照)

2、農業実習

創立当時より林業専門科目の中に「農業」が含まれて、一般農学校より規模は小さいものの農場も備えていた。林と農とは不離一体の考えで、土壌、肥料、作物汎論や気象学等を学習した。狭あいな土地を活用して、寄宿舎玄関前の緩斜地で五百四十坪の果樹園も経営された。果樹園は一時期放任状態の観もあつたが、農場の特別会計制度が導入されたのを契機に、昭和十年頃全面的に手入れがなされた。

その当時の新果樹は次のようであつた。

- ・ 梨 菊水、祇園、二十世紀、早生三吉、長十郎、石井早生、久保梨、パートレット
- ・ りんご 国光、紅玉、祝、デリシヤス、ゴールデンデリシヤス、印度
- ・ 桃 田中早生、橘早生、伝十郎、上海
- ・ ぶどう デラウエア、シヤスラーローズ、ホワイトナポレオン、ナイアガラ、マンドレーヌ、シワイアン
- ・ さくらんぼ ナポレオン等々

図4-8

作付作物	面積 (a)	収穫 (kg)	価格
馬鈴薯	三	五七一・九	二二円七八銭
越瓜	二	一〇四六・五	三八円六五銭
南瓜	三	四七六・八	一〇円七五銭
葱	一・五	一四二・五	六円八四銭
茄子	〇・六	二七七九個	八円三三銭
木曾菜	五	一二九七・五	二四円二二銭
聖護院大根	〇・五	一八七・五	五円一〇銭
山口大根	〇・五	一五〇・〇	二円三八銭
合計	一六・一		一一九円〇五銭

『蘇門会報』七号

また、果樹園の一隅に温床（長さ六間、巾四尺、深さ三尺五寸）を生徒の実習で作り、更に養豚場も作って寄宿舎の残飯等で豚を飼育し、堆肥等の自給肥料製造も行なった。さらに苗圃の外に、桑園も借地して菜園に改変する等、限られた時間の中で農業実習に精を出した。特別会計で農場の収支を償った上、余剰金で実習設備も充実できた。さらに本校農場が地域農家への刺激となったことも見逃せない。

昭和八年の記録によると、菜園は三九〇坪もあった。

その外、帝室林野局から蜜蜂（カーニョラン種で帝室より支局へ御下賜になったもの）をいただいで養蜂もやり、八年には約一〇リットルの採蜜をした。

六、帝室林野局との連携

1、御料林の見学・見習実習

創立以来、御料林の見学は大切な授業の一環であって、小川御料林を中心に毎年行われた。また、現場見習い実習等も御料林で行われた。見習い実習は御料林の作業現場に分散して入り、現場作業員と寝食を共にして実地作業を行うもので、ハードな厳しい面もあった。山林学校を卒業して、帝室林野局に採用になれば、短期間の後には現場の上司として立っただけに、大きな期待が寄せられていた。

2、帝室林野局技師の特別講座

学校の授業の中に帝室林野局の技師を講師とした特別講座が毎年取り入れられて、大きな教育効果を挙げた。昭和一〇年の例をあげると次のようである。

二月二二日 造林学

二月二三日～二六日 森林利用学

二月二七日～二八日 森林経営学

三月 二日 樹木識別法

七月十四日 樹木識別実習で合戸峠方面へ

八月三十一日 樹木識別実習で御岳登山

この外に、計算尺、測量の講義実習等も行なわれたが、講師は何れも一流の専門家であり、立派な資料を準備されて熱心に指導して下さったので、生徒の実力向上に大きく役立った。この特別講座は昭和十八年までは実施されたと思われる。(講師の謝礼は蘇門会が負担したようで、昭和十五年度は、二〇円五八銭の支出となっている。)

七、長野県林業技術員養成所の併設

昭和十六年(一九四一)六月、本校で森林組合技術員養成講習会が二カ月の日程(六月二日〜七月三日)で開講された。

六月二日、午後二時に開講式が挙行された。受講生は県下各地から集まり、当初は講堂に合宿して林業標本室等を使用して学習が行われた。受講生は年輩の方が多かったが、皆真剣に学習し、その姿は直接交流がなかった生徒たちにも強い印象を与えた。

同年八月、蘇門会臨時総会で「現在信濃山林会主催の二カ月の講習会を県の事業とし、期間も一カ年として山林学校に付設し、長野県林業の伸長に資すべし」との意見が出て運動が進められた。その結果、戦時中の林業技術者の不足とあいまって、同十九年四月、国からの市町村交付金を財源として、半年の講習ではあるが長野県林業技術員養成所が本校に併設され、渡辺勇校長が所長になった。これは二二年五月に廃止されるまで六

期にわたり続けられ、二〇〇名が受講した。受講生の主な学習科目は、修身・林政・組合経営・造林・森林保護・測量・測樹・施業計画・森林利用・森林土木・植物・修練・木材芸などで、本校の先生方が担当した。

第六期卒業の宮下國弘(現日本林業技士会専務理事)は当時を次のように述懐している。

物資欠乏の中で、『森林家必携』(本多静六著 写418)を片手に皆短期集中で懸命に勉強をした。渡辺校長以下木曾山林学校の先生や県庁の治山課長は何事にも熱心で、高等専門学校レベルの学習内容であるといわれ、皆プライドを持って学習に励んだ。測樹実習のある寒い日、皆いやがって準備をしていると、外ではもう渡辺校長がわれわれの来るのを待っており慌て外に駆け出したこともあったりと、すべての先生が率先垂範で指導してくれた。

旧制中等学校以上の卒業生を入学資格として、半年の講習で高度な実践教育が展開された。実際に入所する生徒は地元の高林組合長の推薦を得ており、年齢は十八歳から二十歳が多く、長野県内一円から集まっていた。校章は木曾山林学校と同じに周りはヒノキの葉であらう、中に「林技」と刻まれていた。進路先は地元の森林組合や県森連・郡森連に進む者が多く、指導的立場に立ち活躍した。(談)

を占めた。昭和五年の戦績は、柔道が決勝戦の代表試合で惜しくも優勝を逃した。剣道も決勝で敗退したものの個人戦では開校以来初の全勝をして大いに気を吐いた。

県下実業学校競技大会は、同九年から県下中等学校第二部競技大会と名称は変わったが毎年立派な成績を挙げた。

同年頃から射撃大会も行われるようになり、名称はさらに県護国神社体育大会と変わってゆくが、これらの大会は校友会最大の目標であり、特に柔道、剣道、弓道及び庭球は猛練習をして大会に臨み、好成績を残した。

中でも圧巻は同十五年の第三回護国神社体育大会で射撃部が優勝したことである。

「射撃部報（抄）」（『蘇門会報』一八三号）によると、「菊花薫る十一月六日、長野県護国神社例大祭奉納体育大会射撃が陸軍射撃場で行なわれた。集える若人、県下中等学校三六校三百人が早朝護国神社に詣で、続いて午前九時より開会式。母校の榮譽をになって第一的より十二的まで、十二の銃口から一斉に白煙が上がる。轟然たる銃声は付近にこだました。本校は長野中学、長野商業、松代商業等の強豪とともに第五的に向う。川上賢を先鋒に三尾貫次、田沢兵司、鈴木佳六、児野只雄、各々精魂を込めて熱戦数時間。午後二時終了した。

- 一位 木曾山林 一人平均 三五・二点 人員 五名
- 二位 長野中学 〃 三四・二点 〃 一〇名

- 三位 松本商業 〃 三二・六点 〃
- 四位 東筑農業 〃 三二・四点 〃
- 五位 松代商業 〃 三二・二点 〃 五名

優勝の榮譽は燦然として我が校の頭上に輝く。「中等学校国体第一位、木曾山林学校」と発表された時の感激は終生忘れることがない。絶えざる努力と一致団結の力の偉大さをしみじみと思った。」とある。



写4-9 射撃大会優勝賞状（田沢兵司・38回・蔵）

- 優勝時のメンバー
- 川上 賢
- 三尾貫次
- 田沢兵司
- 鈴木佳六
- 児野只雄
- 大島辰夫
- 原 清次
- 中島豊作教諭
- 青木配属将校
- （巻頭グラビア参照）

3、主な成績一覧(抄)

昭和三年・南信実業学校陸上大会

庭球一位、柔道三位、剣道三位、一五〇〇米一位

昭和四年・南信実業学校陸上大会

庭球一位、柔道二位、弓道二位、円盤投二位、

棒高跳三位

昭和五年・県下実業学校武道大会

柔道二位、剣道二位

・南信実業学校競技大会

庭球二位、柔道二位、剣道四位、陸上総合四位

昭和六年・県下実業学校球技大会

砲丸投二位、円盤投五位

昭和七年・県下実業学校陸上及庭球大会

庭球二位、円盤投三位、砲丸投二位、四〇〇米三位。

・南信実業学校武道大会

柔道一位、剣道二位、弓道五位

昭和八年・南信実業学校競技大会

・ 武道大会

・ 県下実業学校武道大会

庭球二位
柔道二位

武道大会
弓道一位

昭和十年代に入ると各競技大会での成績は、中、下位に甘んずるようになった。そんな中で、前記射撃部の護国神社奉納体

育大会での優勝は光り輝くものであった。

二、明治天皇御駐蹕^{ちゆうれん}記念相撲大会

『蘇門会報』第六号(昭和七年)によると「六月二十六日、

福島社会事業協会主催、明治天皇御駐蹕記念奉祝素人相撲が福

島町役場前広場二開催セラレル。当校生徒五十余名出場ス。」

とあることから、相撲大会の歴史はこのあたりから始まったも

のと思われる。続いて昭和十年の校友会記事に、相撲部が登場

して「此日必勝を胸に福島広小路の大会場に臨む、観衆無慮数

千」とある。

先ず東西の幕内勝負より始まり、結果は山林15―木曾中学5

で、次は木曾山林、木曾中学、福島青年団、福島青年訓練所、

御岳自動車の五チーム対抗リーグ戦に入り、成績が次のように

記されている。

本校選手、上条、大宮、羽豆、尹、宮地の五名。

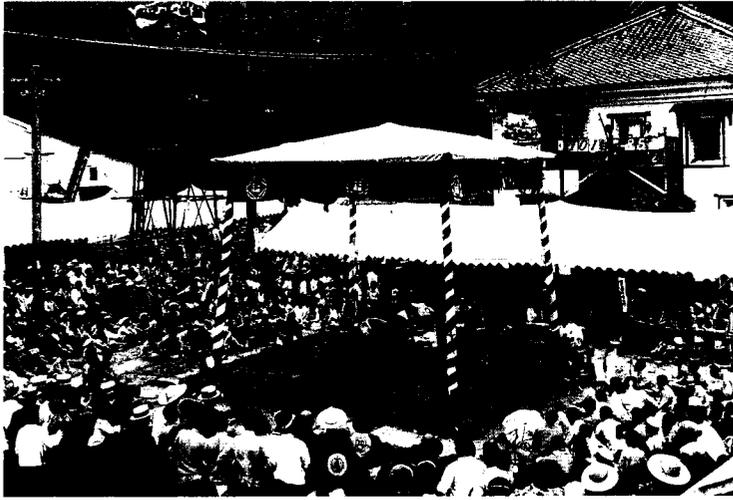
本校 3 ― 2 中学

本校 4 ― 1 青年団

本校 5 ― 0 青訓

本校 3 ― 2 自動車会社

「……ああ勝った！数千の観衆、悲喜こもこもの中に、大会



写4-10 昭和26年明治天皇御駐輦記念相撲大会（木曾福島町制施行百周年記念誌『写真集飛躍のあしあと』）

長、佐藤福島町長より栄ある優勝旗が上条君に授与された。続いて尹君に東京日日新聞社寄贈の大カップ、羽豆君、宮地君、大宮君共に誉れあるメダル・賞品を授与された……」福島郵便局の屋根から声援あり、見れば大先輩佐藤誠一君（16回）である。戦勝を祝して多大の菓子が贈られ……。観衆に混じって先輩諸兄の応援また少なからず……」

この時すでに木曾の名物行事になって、近郷近在の関心を集めていたことが伺える。当日は日中から夜にかけて屋台店が軒を並べ、さながら祭礼のような賑わいであった。

こうして毎年相撲大会に向けての選手の猛練習はもちろん、選手以外は、全校あげた応援団となって応援練習に打ち込んだ。殊に木曾中学校との応援合戦は熾烈で、選手の奮闘にあるいは歓喜し、あるいは悲涙を流した。

校庭で歌う応援歌は演習林にこだまして杭の原一帯に連日響き渡り、村人も応援歌を覚えてしまうほどであった。（応援歌は資料編に記載した。）

戦後もこの相撲大会は引き継がれて毎年熱戦を展開し、山林高校と木曾西高校の対抗戦は「木曾谷の早慶戦」とまで呼ばれた。そしてこの大会の覇者が県高校体育大会で必ず優勝するほどの傑出した一時期を形成したのである。

第四節 蘇門会の発展

一、『蘇門会報』の発行

1、『岐蘇林友』から『蘇門会報』へ

昭和二年（一九二七）九月より改めて『蘇門会報』が発行された。「曩に発表せし蘇門同窓の機関雜誌発行の計画が、茲に五百余名の賛成を得て成立の曙光を見るに至ったことは慶賀に堪へません。旧林友が毎月発行であったに比し、年一回の会報発行では如何とも物足らぬ感じが致しますけれども、旧林友の通り毎月発行とするには一万円以上の基金を要し……」とあり、基金さえ充足すれば年一回を二回、三回としたいので会員の一致協力を願いたいと述べている。更に緊急広告として卒業生に向けて、基金造成が不十分であるので、特段の協力を願いたい、と訴えている。

同年七月の時点で基本金は一〇〇三円十九銭で、会報発行経費は運動会寄付金、林友代金残額を合わせた林友会予備費より支出している。何れにしても、経済恐慌の只中にあり、経済的負担と担当者の労苦は大変であったことが伺える。編輯部だよりの追加として「本誌の出生は難産でしたが、漸く呱呱の声をあげました。この出産については、宮下信一君、宮下正三郎君、

岡西謙三君、樋口徳一君、千田政美君、佐藤誠一君等が、岐蘇在住の卒業生を代表し、小池政美君は学校側を代表して産婆役を努められたことを、会員諸君と共に深く感謝したいと思ひます……」とある。

そして、三年十二月発行の『蘇門会報』第二号では、卒業生の七一パーセントを越える六三〇余名の賛同によって二千円近い基金が造成できて、本年より蘇門会独自の力で発行できるようになったと喜びを述べている。卒業生が如何に母校とたく結ばれているかを物語るものである。

卒業生の中には、「林友会誌は、学校創立一年後に創刊、『木曾山林学校校友会会報』と称し、中途より『岐蘇林友』と改題した。年一〜二回発行。次いで月刊としてきたのに、母校の発展に追従しないのは遺憾……」とか、校友会名簿がある時は成績順に、ある時は「いろは」順に、又ある時は「あいうえお」順で不同であるから、この際「いろは」順にしてはどうか、と提案等をしている。

2、会報発行経費など

『蘇門会報』も、卒業生全員に配布されるものであったから、年を追う毎にその経費が次第に増加せざるを得なくなる宿命を抱えていた。（図4-19参照）

3、発行の苦悩続く

昭和九年（一九三四）十二月発行の『蘇門会報』は一七六号となり、『岐蘇林友』からの通し番号に改めた。昭和十年二月九日、第一回蘇門会総会が開催され、協議の中で今までは一人三円の基金の利子二二銭（七・一％）で会報を発行してきたが、昨今は利子が下って十一銭（三・七％）で一部十七、八銭の会報経費がまかなわれなくなったので、この際基金を一人六円（在校生は進級ごとに二円徴集）にしたい旨を提案し決定をみている。この年の基金は二六九九円。会報発行千二百部。印刷代一部一四銭とある。

十一年三月、第二回総会では、会報題名を『岐蘇林友』にもどしたい旨の発議もあったが、会長（学校長）が否決している。更に、基金一人六円を元に戻して三円とし、名簿を会報から切り離して別印刷とした。また会報は毎年随時二・三回発行を目指す等、時局の推移に伴ないよりよいあり方をめぐって揺れ動き、当時の苦勞がしのばれる。

図4-9 『蘇門会報』発行経費など（各号会報による）

会報番号	発行年月	基本金	発行経費、部数等
1号	昭和2年9月	1,003円19銭	
2号	3年12月	2,020円91銭	113円50銭
3号	4年12月	2,104円15銭	127部80銭
4号	5年12月	2,196円	143円66銭 1,100部
5号	6年12月	2,340円	143円30銭 1,200部
6号	7年12月	2,421円	190円 1,200部
7号	8年12月	2,505円	240円21銭 1,300部
176号	9年12月	2,601円	224円63銭 1,200部

十二年七月、一七九号を発行し年二回発行が試みられた。十三年十二月、一八一号発行。この年独立名簿が発行された。名簿印刷費七五円送料二五円。基金三〇五二円七二銭。会報印刷発送費は四九円九六銭であった。

十七年十二月、第一八五号が発行されたが、編集後記の中に、「……惜しいことに紙また配給。止むなく御寄稿全部を掲載し得なかったことを御了承願います（編集兼発行人丸山寛）」とあり、以降大戦終了まで『蘇門会報』は発行された形跡がない。経済恐慌、十五年戦争という激動の昭和初期にあつて、幾多の困苦をしのいで、母校と蘇門会と卒業生を強いきずなで結んできた『蘇門会報』の功績は計り知れない大きいものがあつた。

二、各支部の活躍

1、卒業生大会

昭和一〇年（一九三五）二月九日、第一回蘇門会総会が母校で開催され、二四名が出席した。それまでは、各地区で蘇門会支部を作つて同窓生が相集まっていたが、ここで本部―支部の関係組織が確立したのである。

『蘇門会報』に掲載された第一回総会の通知文を見ると、「当会幹事の決議により左記の通り卒業生大会開催致度候間万障御差練御出席被下度此段及通知候也」とあり、卒業生大会即ち総

会であって、会長には高久常敬校長が就任した。

卒業生大会は、八年二月十一日、地元福島蘇門会の斡旋によって、木曾谷在住卒業生大会として開催されたのが始めてであり、この会が毎年二月上旬に母校で開催するように決められた。翌年第二回が持たれ、ここで西筑摩郡内支部の設置促進が発議されたが、当時郡内には福島、上松、鳥居（奈良井、藪原）の三支部が設置されていただけだった。

昭和一〇年（一九三五）十二月発行の『蘇門会報』には、会則第九条「多数会員の在住する地方においては便宜支部を設置し、代表者を定め、その旨を本部へ報告すべし」による支部設置を呼びかけているが、本部として、

① 支部らしきものがある地方

- ・ 安筑蘇門会 南北安曇郡、東筑摩郡、松本市
- ・ 山梨 山梨県
- ・ 札幌 札幌市及付近
- ・ 恵須 樺太恵須取付近
- ・ 長野 長野市、上下水内郡、上下高井郡、更級郡
- ・ 岐阜 岐阜県庁
- ・ 苫小牧 北海道苫小牧付近

② 将来支部設置を希望する区域

- ・ 郡下 新開村、日義村、王滝村

・ 県下 小県郡、更埴郡、北佐久郡、南佐久郡、上

田市

- ・ 新潟県・静岡県・愛知県・福島県・岐阜県飛騨
- ・ 茨城県・栃木県・群馬県・富山県・石川県・福井県
- ・ 東京府・神奈川県・千葉県・大阪府・兵庫県・埼玉県
- ・ 北海道中部・樺太・大泊・豊原・敷香

をあげて、「右は本部において大体見当で作ってみたものでもあります。設立の上は役員、規約をお送りください。」と結んでいる。

2、広がる蘇門会支部

各支部の主な動静は次のようである。

昭和九年二月 第三回鳥居蘇門会開催、役員会則決定、

会長 中村豊次 副会長 奥原吉工門

三月 木曾南部（大桑村以南）蘇門会開催、会則決定

会長 林哲次 副会長 林与五郎

出席者 二十名

一〇年一月 福島蘇門会開催

会長 樋口徳一 副会長 千村万三

十一年二月 松本支部第二回例会開催

会長 輪湖正田 副会長 中島源一、加藤純一

一〇月 第一回山陰蘇門会開催（松江市）

松田力熊初代校長出席 参加者八名

十二年三月 長野蘇門会開催 十一名出席

十四年二月 福島県蘇門会開催

世話係内田新之助、三二名在籍中、十三名が出席。

十五年六月 福島支部 家族慰安の夕べを開催

発起人佐藤誠一、母校職員家族、会員家族合同の

懇親会

十六年四月 台湾支部発足

支部長 松川久吉、会員二十九名

支部が次第にふえ、母校と卒業生との結びつきが組織的に深められていった状況が伺える。

3、大戦下の総会

昭和十七年一月、蘇門会総会で、概略次のような決議がなされた。

① 町村森林組合技術員養成所を母校に併設する件を一層猛運動すること。

② 会員名簿発行規約を改め、基本金三円を五円に増額して、名簿を毎年発行すること。

③ 学校林設置の件

・ 地元町村又は近くの公有林に部分林の方法で設置し、生徒の実習、勤労作業で造林、撫育する。

・ 設置面積二十〜三十町歩を十カ年で造成する。

・ 経費は蘇門会で負担し、昭和十七年春より着手の予定で進行する。

・ 蘇門林設置委員として、県庁側四名、地元側十四名、学校側三名の委員を選出。

この決議は、未曾有の大戦の中で、本部支部連携のもとに母校の恒久的発展を図る壮大な母校愛の計画であった。しかしながら、次第に深刻になる戦局、物資欠乏や学徒勤労動員の拡大等の趨勢の中で、遂に実現することなく終わった。戦後、校舎全面改築を主とした創立六十周年記念事業の一環として、旧新開村に蘇門林八・五ヘクタール余りが造成された。往時と情勢は一変したものの、設置委員に名をつらねた方々の母校を愛し、山を愛する執念であったといえよう。

4、海外（朝鮮、台湾、樺太、満州等）における卒業生の活躍

蘇門会の組織と『蘇門会報』などによって、卒業生の活躍は後輩を啓発し、海外雄飛も定着し充実していった。

① 朝鮮における卒業生

『蘇門会報』二号（昭3）に、名取寿（24回、京城黄海社林業部）は、在住蘇門会員およそ五〇名近く、特に第一回卒業の岡戸広治、原四郎が朝鮮民間林業の振興に尽力されていることを伝えている。

同じく会報『二八〇号』（昭12）には、桜井健二（26回）が蘇門会員五九人の状況を報告している。それによると、初期の卒業生は民間林業に進出して活躍し、やがて地方庁山林課や総督府営林署に就職するものが増加している。何れも林業の第一線に立って率先し、朝鮮林業の発展に尽力している様子を力強く伝えている。昭和十二年（一九三七）当時の卒業生は、営林署十二名、地方庁二七名、会社十一名、実業二名、その他七名、計五九名となっている。同十四年の『蘇門会報』一八二号には、前述桜井健二が「朝鮮平南便り」を投稿して会員の親睦を伝えているので、その一部を抄出する。

昭和十四年四月二十九日、平南蘇門会第一回を牡丹台で開催——三十年前は禿山なるも、長年の砂防工事の努力により、緑衣をまといたる牡丹台は、眼下に大同江を見下ろし眺望絶佳なる天下の名所——。母校の発展の為益々拡大して、平北、黄海道の会員にも案内状を出したい——。木曾三年間の生活の思い出話しに終始し、十七、八才の生徒になりきって——酔眼も

うろうとして、木曾節が出るやら、酔筆を走らせて母校に便りするやら——寄せ書きなす等——最後に「雲井にそびゆる——」と十余年ぶりに校歌を合唱して解散。

出席者、山下不二三（14回）、糸魚川良二（16回）、代田多見雄（21回）、小林茂樹（26回）、桜井健二（26回）、以上五名。

② 台湾における卒業生

昭和十四年（一九三九）一〇月六日、台湾花蓮港街で、台湾蘇門会創立総会を開催した。田本秋実（25回）によると、当日は松川久吉（12回）、小沢安親（15回）、原田不二夫（26回）、七原俊男（28回）、張山鎌治（33回）計六名出席とある。同年現在の在住卒業生は二三名で、内訳は、総督府営林署八名、総督府林業試験所四名、総督府専売局二名、高雄州京都帝大演習林二名、地方庁四名、会社三名で、何れも台湾林業及び土木関係で大活躍中であると記されている。

また台湾からきた邱合慶（30回）は、卒業後故国で石材加工業を営んだようで、後年水牛の置物（大理石製）を母校に寄贈してくれた。（写4・11・12）

③ 樺太・満州における卒業生

昭和十一年（一九三六）末、樺太及び満州に活躍していた卒



写4-12 底面には「贈母校」とあり、邱合慶の住所・氏名等が記されている



写4-11 邱合慶（30回）から贈られた水牛の置物。大理石の目が美しい

業生はおおよそ次のようである。

樺太在住者 官庁関係十六名、会社関係三三名、その他六名、計五五名
満州在住者 官庁関係十四名、会社関係九名、その他五名、計二八名（軍務従事者を除く）

この当時、台湾、樺太は我が国の領土であったが、満州国は治安も不十分で、格別苦勞が多かったと推察される。

満鉄営林区勤務の米山芳郎（16回）は度々『蘇門会報』に投稿し、満州での奮闘振りを伝えている。同報一七七号（昭10）の寄稿から抜粋してみよう。

当営林区は昭和十年一月十五日に新設され、鉄道建設用の建築材、橋梁土木用材、電柱、枕木の出材をしています。森林面積二七〇〇町歩。今年の伐採量は原木十五万石、枕木四十五万丁（十五万石）、計三十万石の予定であります。……伐木は択伐にて、建築用材は二間材、三間材の末口一尺三寸以上、枕木は内地より大きく中二三センチ、厚さ十六センチ、長さ二メートル六〇センチ、三丁で一石あります。……当地は八月末に初霜あり、九月十三日に初雪が二寸程積もったのであります。紅葉は九月二十日頃から月末までが美しくありましたが、山中には匪賊が多く、内地のように自由に山登りもできません。当

営林区では警備員一〇〇名を配置し、軽機関銃三丁と各人には小銃を持たせ、我々が現地に出る時は、距離、地域に応じ五、二十名の護衛をつけて歩くので、意の如くならず閉口します。

とある。しかし、山林健児は心身ともにたくましい者ばかりで、何処においても素晴らしい活躍をしていた。以下、その一端を紹介しよう。

「拝啓ご無沙汰」坂巻正造（28回）

「……同窓の方々、暇があり、徒然に読んでやろうとお考えの方はお読み下され度……二八期生は貴公等に宛てた便り故必読せられ度し」との書き出して始まっている中から、樺太旅行の部分を抜粋すると、「……樺太は到る処に蘇門出の方々活躍しておられる。林務部、王子製紙、秋木、三井等々、蘇門出のいない所は無い。その誰もが、ハチ切れるような闘志に燃えて頑張つて居られる……」「樺太には田中と杉本がいるが、杉本には会えなかつた。田中は昔からそうであつたように、全く豪傑になつていた。肩幅広く、丈は相変わらず小さいが、髭を生やし、どう見ても樺太の山官である。きれいに揃つた歯を出して肩をゆすりながらワッハッハッハと笑うところなんか実に気持ちよい男だ……」。『豊原には大先輩松沢氏（12回）が居られる。林業課造材の主任技師で、烈々たる闘志は樺太随一とか……王子にいる中幡氏（33回）川合氏（34回）すこぶる元気で

若い意気に燃えていた。泊居で関氏（33回）、大泊で赤城氏（33回）にお目にかかった。殊に赤城氏は同郷で……」略。

『蘇門会報』第一八一号（昭13）

「在滿二十八期生」荒井明男（28回）

「……坂巻が二八期生を主題とした内地、北海道、樺太等の消息を書いてくれたが、満州のことについて一行もあげてなかつたので……去年の坂巻の稿に追補したいと思う。」「浅川が吉林省九台县公署にいる……あの柔道で鍛えた荒削りの風貌で『オー 荒井！』と呼ぶ処など全く飾り気がなく気持ちがいい。仕事の方もなかなかの意気を持つて……」「吉林の満鉄に星加がいた。二年前の秋、新京で若い者だけで同窓会をやつた時に会つただけだが、当時満鉄で使用する幾十万挺という枕木を、一人で背負つて配給しているような快気焔を上げておつた。

『星加益々心臓也』の感を深くした。」「安東の近く鳳城県に田口（嘉）がいる。之も又、スピリトはたいしたものだ……

『そんなムクれた話アラズカ』とお国言葉丸出し……二八期の信州色の強い横綱だろう。」「……廷吉の営林署の細田は、元來身体は丈夫な方ではなかつたと記憶するが、療養のため帰国中とか、二八期秀才組の一人細田のカムバックを祈るや切なるものがある。次に依田が昨秋渡満して牡丹江省寧安県にいる……又春陽の親和木材に山本（慎）がおり、北満の軍関係の仕事に松沢がいるそうだ。広い満州だが、一度くらい会う機会もある

だろう……」

『蘇門会報』一八二号（昭14）

④南米ブラジルの卒業生

昭和十一年（一九三六）現在、ブラジルに三人の会員が活躍している。大屋悦三（24回）は『蘇門会報』五号（昭和6）に、「来たれ耕せ伯国へ」とブラジルの現状を伝えて後輩に呼びかけ、朝賀和七郎（26回）は「海を越えて、日の丸の国旗をふところに、新天地への若き飛躍、内地の就職難を蹴飛ばして、回天動地を夢見みるア ند ス 健 児……在南米の会員も二名居る……彼の大南米にわが蘇門会支部を建設しようではないか」と燃え上がる意気を示している。

5、卒業生の熱き思い

昭和十三年十二月、『蘇門会報』一八一号で、内田新之助（15回）が、母校の発展を願って「一万円講堂献納の提唱」をした。その提案理由で「我校は県下中等学校中、常に県会辺りの問題となつた事、即ち、相当多数の他府県人を年々入学させしむることは未しも、実に其卒業生の大半を他府県に送り出すといふことが問題となるのであって、そのため学校経費の予算は常に僅少勝ちである由。安藤前校長は県の課長当時、山林学校は結局御料の学校に戻していただかないとね、と嘆息された。最も

蘇校精神を涵養すべき中枢としての寄宿舎ですら教室増築経費の不足から木工室に変わって……後設された木曾中学校、女学校には奉安殿も出来たが、母校では漸く三十周年に設置し得たような次第で」と、母校のおかれた現状を述べ、さらに本校に講堂のないことを憂えた。次いで四〇周年記念を目指し、一人十円（一年一円十年継続）を出し合い、一万円を集めて母校のために大講堂を建設しようと呼びかけた。これは実現はしなかつたが、卒業生の母校に寄せる熱き思いである。

三、戦時下における二つの開校記念式典

1、創立三十周年記念と御真影奉安殿の建設

創立三十周年記念事業は、二年遅れて昭和八年に実施された。主な事業は、奉安殿の建設、三十周年記念林業展覧会、記念式典、記念運動会などであった。

①奉安殿の建設

昭和七年十一月、校友会長である中村三郎校長は、（略）然して当地中等学校三校中、御真影奉安庫の設なきは独り当校のみにして（中略）依つて、今回蘇門会幹事会に協議し、さきに二十周年記念会より学校校友会に引継ぎたる金額の

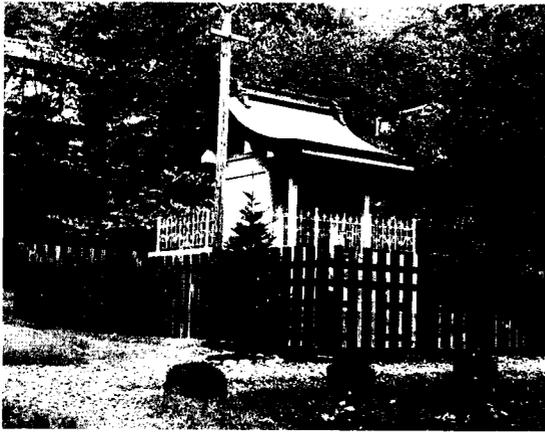
残部の一半を割き、之と職員生徒及有志の奉仕的作業により奉安殿の建設をなす事と致候に付、御承知置相成度候

長野県木曾山林学校校友会会長 中村三郎

各位

『蘇門会報』 六号

の一文を会報に「謹告」として載せた。明けて、同八年七月二一日、奉安庫建設地鎮祭挙行。十月三十日、奉安殿落成、御真影奉遷式を挙行した。



写4-13 総ヒノキ造り、銅板葺きの奉安殿
周囲は記念公園として整備された
(現在の林業棟入口付近)

尚、その建設費総額は一六五六円二〇銭で、内訳は次の通りである。

図4-10

三十周年記念事業収入費	
○事業寄付金	1,024円50銭
○二十周年残金及び 校友会基金	2,000円
○同 利子	44円46銭
○職員寄付金	40円
○生徒寄付金	40円
○祝儀、他	134円48銭
計	3,283円44銭

図4-11

奉安殿建設費	
○建設費	1,487円
○外柵建設費	143円50銭
○設計料	10円
○地鎮祭 修拔式	10円
○奉安殿内絹布	5円70銭
計	1,656円20銭

三十周年記念事業総収入の1/2を奉安殿建設に支出している

②三十周年記念林業展覧会

三十周年記念林業展覧会は、卒業生に林業関係標本類、図書、設計図、模型等々の寄贈を呼びかけ、それをもとに展覧会を開催する構想が進められた。しかし準備の都合や標本等収集の都合上、十一月二日の記念式典と併せて開催となった。『蘇門会報』第七号によれば、卒業生が寄贈した標本類は、種子、腊葉、材鑑、木材工芸品、書籍、パンフレット、写真等、多種多様ののぼった。加えて帝室林野局その他よりの病木標本、伐木用具、写真や本校生徒の製作品も多数であった。展示室は、利用室、造林保護林産室、森林土木測量室、木材工芸室、参考室、記念室、木工電力室、木工製作品即売室の八室にわたった。

当日は開会前より観覧者雑踏、近隣小学生等の団体見学者も

来て、校内外に溢れ、斯界の知識・森林思想普及のために大いに得るところがあった、という。

ちなみに、小笠原島の柳沢止之進(12回)寄贈の南洋材鑑(へゴ、マルハチ等)はじめ、木曾五木衝立、京大演習林の杉丸太、大平山演習林カラマツ樹幹析解図、山口村寄贈の竹細工類、御料より病木標本、山梨蘇門会寄贈の焼絵額類、他卒業生からの各種材鑑、種子標本等々は現在も標本室に保管され教材として活用されている。

③ 創立三十周年記念式典

創立三十周年記念式典は昭和八年十一月二日舉行された。

その模様を『蘇門会報』七号の記事から抜粋すると、先ず会場の様子を「県道から入った処に大きな緑門が設けられ、人々は万国旗に導かれて校門に入る。木立を透して記念公園に新築の御真影奉安殿銅屋根を拝する。定刻間近には久潤を舒する人やら、卒業以来の邂逅を喜ぶ人やらで一杯」と述べた。次いで式典は、「君が代の合唱で始まった式は、一糸紊れず進行。長官閣下(県知事)の告示。来賓及び卒業生各位の祝辞。何れも我校の過去を称賛し将来を祝福する辞に満ちていた。佐藤福島町長は本校創立当時を回想し今後の希望をも添えられ、卒業生吉川真夫君、古畑今朝茂君立って交々所感を披瀝された。七十二通の祝電は、内地はもとより遠く樺太、北海道、朝鮮等に活躍

の卒業生から寄せられたものが大多数で、一語一語母校愛に溢れ錦上に花を添えられた。」「引続いて本校創立功労者並びに勤続職員へ感謝状及び記念品贈呈、校歌合唱で式が終ったのは零時少し過ぎであった。」という。

さらに「此日新開村在住の卒業生及び杭の原の人々の好意による十数発の煙火は、早朝から空に響き谿間に飮して祝賀の気分を弥が上にも高潮せしめた。

因みに今回の行事に対し西筑摩郡各町村から寄せられた好意



写4-14 創立三十周年記念式典 本校講堂にて

は厚く感謝する。特に福島町、新開村は広小路、筏橋の袂、及黒川渡橋に立派な緑門を設けられて祝意を表せられた事は永く忘れることの出来ぬことである。また地元福島蘇門会員諸氏が学校とよく連繋を保たれ、拾数回に亘りたる会合に、寄付金の斡旋に、其他に努められた熱誠は洵に涙ぐましいものがあつた。今回の記念行事を滞りなく終了し得たのは同会員諸氏の力に俟つ処が多かつた。」と、その盛会ぶりと感謝を伝えた。

また、この三十周年記念の意義を校長事務取扱であつた増田篤志教諭は式辞の中で次のように述べた。

式 辞

長野県木曾山林学校校長事務取扱

増田篤志

錦秋ノ粧ヒ将ニ酣ナラントスル時、茲ニ本校創立三十周年祝賀記念ノ式典ヲ挙ゲ長官閣下並ニ各位ノ貴臨ヲ辱フスルコトヲ得タルハ本校ノ光榮トシテ感謝措ク能ハザル所ナリ。惟フニ林業ノ経営ハ国家百年ノ大計ニシテ一日モ忽ニスベカラズ。顧レバ明治三十四年全国ニ率先シテ林業振興ノ基礎タルベキ人材ヲ育成センガ為メ西筑摩郡立トシテ創設サレシハ蓋シ卓見ト云ハザルベカラズ。明治三十九年県立ニ移管、昭和四年木工専修科ノ新設ヲ見テ現在ニ及ベリ。爾來年ヲ閱スルコト三十有三、卒業生ヲ出スコト本科尅千百八十六名木工専修科六十八名、皆克ク本校ノ設立ノ趣旨ヲ体得シ全国各地ニ分布シテ本邦林業界ニ貢献寄与スルアルヲ見ルハ洵ニ欣快トスルトコロナリ。

本校ガ茲ニ記念式典ヲ挙行シ得ルハ創立以來郡内各位ノ心カラナル後援ト当局ノ周到ナル指導督励ト本校歴代職員諸氏ノ熱誠尽瘁並ニ卒業生諸氏ノ母校ヲ愛護セントスル赤誠トノ賜ニ外ナラズト深く肝銘スルモノナリ。職ヲ本校ニ奉ズルモノ及ビ生徒諸子ハ須ラク此機会ニ於テ本校ノ担ヘル使命ノ重且大ナルコトニ思ヲ致シ益々發奮精勵校史ノ光輝ヲ發揚シ本校ノ声誉ヲ斯界ニ重カラシメ以テ国家ノ要求ト期待トニ添ハレンコトヲ期セザルベカラズ。本日ノ式典ヲ挙グルニ当リ過去三十余年ノ事歴ヲ回想シ感謝ト所懐トヲ陳ベテ式辞トス。

昭和八年十一月二日

さらに本校創設時に思いをさせ、改めてその功労者を顕彰し、次のような感謝状を贈呈した。

感謝状

明治三十四年四月本校創立セラル、ヤ当時貴下ハ夙ニ其ノ抱懷セル木曾独自ノ教育機関ナカルヘカラザル所信ヲ高潮シ其ノ動向スル所ヲ先導シ奔命ヲ以テヨク本校ノ設立ニ力ヲ致サル爾來三十年今日ニ至リ益々校運ノ隆盛ヲ見ルハ一ニ貴下率先高潮ノ實ニ外ナラズ茲ニ本校創立三十周年記念式ニ当リ記念品ヲ贈呈シ謹デ感謝ノ意ヲ表ス

昭和八年十一月二日

現県会議員

小野秀一殿

『蘇門会報』七号

④ 盛大な記念運動会

これも『蘇門会報』から、その様子を抜粋する。

「十一月三日明治節の爽快な秋日和のもと、万国旗を蜘蛛手に懸け渡し、マイクロホンからは運動の注意などが放送され、各学年の控席には奇抜な旗が押立てられ、応援歌やら拍手やらで澁刺たる若者の意気を揚げていた。

この時、突如、朝香宮妃殿下薨去が報ぜられた。一同謹んで哀悼の意を表し奉り場内外にこの旨を掲示した。而して不敬に亘らぬ程度でプログラム通り進行することにした。練習してきた応援歌も、行進曲レコードの放送、煙火もご遠慮申し上げた。しかし、大勢の人々がつめかけ「場を囲む観衆の数は刻々加はって、黒川渡橋付近は、運動会見物の人々のため一時身動きもできぬ程であったという。黒川方面では運動会見物の回状さえまわった」という。また競技も、尋常小学校三年以下の球拾いは、一列では間に合わず三列にもなあって、準備してあった水素ガス入りゴム風船百箇ばかりでは半数にも満たなかったという。「煙幕を利用し壮烈を極めた『国家非常時』は、時節柄人の目を奪った。又、上田小学校女生徒の遊戯は誠に可憐なものであった」と述べ、「斯くして全く無事に記念運動会を終った

のは午後二時半であった。」と結んだ。

2、校友慰霊の創立四十周年記念式典

昭和十五年（一九四〇）、支那事変と呼ばれた日中戦争は四年目に入り、我が国は中国側の徹底抗戦のため泥沼に引ずり込まれて傷口をひろげ、損耗を深めて戦争終結のめどが立たなくなっていた。

中国側を支援する米・英両国との関係は悪化の一途をたどり、秋にはついに「日独伊三国同盟」という破滅への道に向った年であった。

国内では「紀元二六〇〇年」の大合唱のもと、全国各地で皇紀二六〇〇年式典が行われた。このような情勢下で、本校は創立四〇周年目に入ったが、記念式典は一変し「戦没校友慰霊祭」に変わった。

日露戦争以降、戦死、戦病死された十一名の校友慰霊の式典は、開校記念日の五月十五日、遺族を招き、来賓五六名、卒業生三一名が、全校職員、生徒と共に参列し、本校講堂で午前九時より神式及び仏式で厳粛裏に挙行された。

石田恭吾校長の祭文、帝室林野局辛木宣夫支局長、小野秀一県会議員、佐藤誠一卒業生代表の弔辞、県知事ほか多くの弔電が捧げられ、最後に校歌合唱、遺族挨拶をもって正午近く終了した。これは百年の校史中、誠に悲しい開校記念日であった。

戦没校友は次の十一名である。(敬称略)

- | | | |
|-------|-------|------------|
| 中村 茂 | (1回) | 西筑摩郡開田村 |
| 坂巻利一 | (16回) | 〃 神坂村 |
| 立道乙松 | (17回) | 三重県名賀郡国津村 |
| 磯村四郎 | (22回) | 西筑摩郡吾妻村 |
| 小岩敏太郎 | (27回) | 三重県阿山郡上野村 |
| 伊藤良吉 | (29回) | 岐阜県恵那郡明智町 |
| 平田正吾 | (29回) | 西筑摩郡新開村 |
| 門坂勇雄 | (30回) | 岐阜県吉城郡吉川町 |
| 榎本準二 | (31回) | 静岡県賀茂郡上河津村 |
| 佐藤佐平 | (32回) | 名古屋市区沢井町 |
| 小木曾栄治 | (専2回) | 下伊那郡竜江村 |

『蘇門会報』一八三号

尚、右十一名の他にも志津弁次郎(2回)のように在学中に出征戦死のため卒業できなかった者もいる。

この式直後の同年六月九日にも、本校配属将校であった山岸袈裟雄陸軍歩兵大尉が戦死し、新たな悲報が本校へもたらされた。戦争の暗い影がいよいよ身近に迫ってきたのである。『蘇門会報』一八三号は、厳しくも人間味があつて生徒に慕われた山岸大尉の追悼及び戦没校友慰霊祭の特集を組み、恩師及び校友の死を悼んだ。



写4-15 戦没校友の遺影を飾った祭壇

しかしながら、戦況はさらに混迷を深めて太平洋戦争へと突き進んだため、昭和二〇年八月の終戦までには、さらに多くの校友たちが雄図空しく戦場に散った。その消息の把握は、敗戦の混乱もあつて、実情を漏れなく、かつ正確に把握することができず、今般一〇〇周年記念誌編集にあつても止むなく断念した。誠に申し訳なく慚愧に耐えない次第である。

第五節 戦時体制下の教育活動

明治以来、「富国強兵」を合言葉にした我が国は、第一次世界大戦を経て、自他共に認める世界列強国となり、講和会議には五大国の一つとして臨んだ。僅か半世紀間の驚異的な躍進であって、それが欧米諸国の脅威を生む結果となった。日本恐るべしの風潮は一九二一年（大正十年）の日英同盟廃止によって表面化し、ワシントン条約により我が国海軍の軍備制限がなされる等、我が国への圧力が次第に強まってきた。また、第一次世界大戦は、今までの戦争とちがって国家の総力戦の様相を呈し、一方では革命や、民族運動を生むきっかけにもなった。一九一七年（大正六年）のロシア革命、大正八年の朝鮮独立運動、中国の抗日民族運動等がそれであり、そうした動きに反応して我が国は、次第に国家主義、軍事大国への道をとるようになっていった。

一、軍事教練と査閲

1、強まる軍事教練

大正一四年（一九二五）、陸軍現役将校の学校配属令が公布されてより、組織的、計画的軍事教練が中等学校に導入された。

満州事変（昭和六年）の前後から、さらにエスカレートの一途をたどり、昭和五年からは県下中等学校射撃大会が実施されるようになり、翌年には、本校三年生が配属将校に引率されて、松本五十連隊で管内宿泊訓練が行われた。この訓練は同十二年の支那事変勃発で中止されるまで続けられた。代って学校での行軍や野外演習、更には他校との合同演習、中信地区連合演習、射撃大会等々、その規模や内容に実戦的要素が強く加えられていった。

2、ご親閲

昭和九年（一九三四）十一月、高崎練兵場で茨城、栃木、群馬、長野、新潟、埼玉の中等学校生徒へご親閲が行われた。本校からは、学校長ほか職員二名、生徒六名が校旗を奉持して天皇の前を行進した。同十四年に行われたご親閲は全国中等学校の代表を東京に集めて行うという大規模なものであった。

3、極めて厳しい査閲

毎年秋に実施された査閲は、一カ年の軍事教練の成果を問う極めて厳しいもので、査閲官は地元松本五十連隊の連隊長クラスが来校して行った。昭和十六年一〇月の本校の査閲は、概略次のようであった。



写4-16 閱兵分列行進。査閲官の前で、「歩調をとれ、頭右」の号令のもと、査閲官の方を向く

場所 学校々庭（裏庭）
査閲順序 ①校旗に敬礼

②校長、査閲官閱兵

③服装検査

④教練査閲

⑤閱兵分列

⑥査閲官訓辞

査閲官訓辞は講評であり、評価は「優秀である」から「概ね可なり」にわたる一言で、本校の総てが決まるとあって、職員、生徒の緊張と努力は並々ならぬものがあつた。

二、戦意高揚の諸活動

1、出征軍人の見送り

『蘇門会報』学校だよりに、昭和七年一月三十日、戦没者遺骨の木曾福島駅通過を、生徒総代で弔送した記録が載っている。同年三月には、松本五十連隊が上海事変のため出征、軍用列車で数回にわたって福島駅を通過し、全校職員生徒が歓送した。以降出征軍人の歓送、傷病軍人の見送り、帰還兵出迎え、遺骨弔送等、その都度職員生徒が駅に集合した。ほとんど毎月であり国を挙げての行事となつた。しかし、やがて太平洋戦争が激化して、おもてだつた出征軍人の見送りすらできなくなつた。

2、神社参拝

郷土の部隊、松本五十連隊が戦陣に臨んで以来、戦勝祈願、出征軍人の無事を祈つて、忠魂碑、忠霊殿、水無神社等の参拝が頻繁となつた。奉安殿を朝夕礼拝するのはもちろん、紀元節、（二月十一日）、陸軍記念日（三月十日）、海軍記念日（五月二

七日)、日中戦争(支那事変)勃発日(七月七日)等、事ある毎に戦勝祈願参拝が行われた。

3、武道鍛練

戦局の推移に伴って、柔道、剣道、弓道や銃剣術等は鍛練に力が入った。柔、剣、弓道は、何れか一つは必修で、毎年の寒稽古からはじまり、近隣中学校との練習試合、県下実業学校武道大会等々では、選手は母校の名誉を担って力戦奮闘し、激しい熱戦を毎年繰り広げた。

当時は技術の練磨は勿論、特に心身の鍛練が重視された。寒中早朝の火の気のない講堂での稽古や、恒例のスキー大会でも耐寒訓練を兼ねて制服以外は襟巻き一つ許されぬ状況でもあったが、生徒は十分適応して楽しむ余裕すらみせるたくましさがあった。学校日誌に次のような記録が残されている。

- ・ 昭和十三年八月六日 武道練習のため本日より四十分授業。
- ・ 昭和十四年二月四日 武道納会、階級試験、昇段者十八名。

4、町村行事への参加

地元出征兵士の中に戦死者、戦病死者が出ると、遺骨を迎えて町葬や村葬が行われたが、その都度職員生徒も参列して弔意

を表した。昭和十二年(一九三七)日中戦争が始まると共に、その回数は増加した。又、その年十月、上海戦線勝利祝賀の提灯行列に参加したのを始め、十二月の南京陥落祝賀提灯行列等より太平洋戦争緒戦の勝利祝賀に至るまで、戦意高揚を図った町村行事には学校をあげて昼夜を分かたず参加した。

5、時局講演の聴講

軍事に関する講演、国体や日本精神に関する講演が地元福島町などで開催されることに生徒に聴講させた。思わず拳こぶしを握りしめるような、軍人の実戦談を始め、大学教授の精神講話に至るまで内容は多岐であったが、総じて戦時下の意識高揚を図るものであった。

昭和十三年を例にとると、

- 三月 九日 陸軍記念日に関する軍事講話
- 八月二日 徳川侯の支那視察談
- 九月 六日 防空訓練に関する講話
- 十一月 七日 県会議員の戦地慰問談
松本五十連隊長の実戦談
- 十一月二五日 新愛知新聞特派員の北支視察談

これらの講演を聴講している。

三、修学旅行・登山・遠足

1、修学旅行

昭和に入ってから、修学旅行の多くは関東方面に向けられて、およそ六泊七日の日程で行なわれた。珍しいことに昭和三年には、二、三年生が同時に関東方面へ、翌四年は二年生は奈良京都方面へ、三年生は大阪、吉野方面へ同時に旅行している。また、奈良県吉野林業学校は、昭和十五年五月まで、ほとんど毎年本校へ来訪して柔剣道の試合などの交流をしているのに、こちらからは同四年に出かけた記録しか残っていない。

昭和十二年の修学旅行概要は次のようである。

期間 五月十六日～二十二日（六泊七日）

三年生四十四名、引率教諭二名。

第一日 木曾福島↓長野善光寺参拝↓高崎↓日光中禅寺湖、華

厳ノ滝見物（泊）

第二日 帝室林野局養魚場、龍頭ヶ滝見学↓足尾銅山鉱害の山

を見学↓日光東照宮参拝↓東京（泊）

第三日 ハイヤーに分乗して上野公園、動物園見学↓林業試験

場見学（泊）夜の銀座など見物。

第四日 ハイヤーに分乗して大震災記念館、浅草寺参拝↓靖国

神社参拝↓明治神宮参拝↓乃木邸見学↓泉岳寺参拝（泊）

第五日 東京↓横須賀、海軍工廠等海軍基地見学↓鎌倉↓江ノ

島（泊）

第六日 江ノ島↓名古屋、名古屋城など見学（泊）

第七日 汎太平洋博覧会见学↓名古屋↓木曾福島。

当時は特急などのない時代で、列車移動に長時間かかり、見学も大変な強行軍であったが、さすが山林健児は一名の落伍者もなく帰校している。

修学旅行は生徒の最大の楽しみでもあったが、戦時の影響を



写4-17 昭和12年 修学旅行 皇居楠公銅像前
（『卒業アルバム』橋渡敬一・35回・蔵）



写 4-18 御嶽頂上にて（昭和5年9月19日・高木利男・30回・蔵）

受けて、昭和十五年には三年生の檀原神宮、熱田神宮参拝という異例の旅となり、次いで昭和十七年十月二五日から二泊三日の聖地参拝旅行（多摩御陵、林業試験場、宮城、靖国神社、明治神宮など）を最後に中止された。

2、登山・遠足

一、二年生は例年七月から八月に駒ヶ岳、御嶽登山を行った。昭和十七年までは毎年実施の記録が残っているが、それ以降は

戦争激化にともない、学徒勤労動員などの頻度が高まって登山の余裕すらなくなったようである。御嶽登山の例あげると、学校——開田村——御嶽頂上（泊）——三岳村——学校と往復すべて徒歩であった。国民心身鍛練運動の一環に位置づけるとともに、森林植生の変化を学習する行事でもあった。

これに反して遠足は各学年ともに、近距離の目的地で終始、レクリエーションを加味した行事であったようだが、昭和十五年を最後に終息しており「非常時」の暗影がこんなところにもで及んでいる。

四、勤労奉仕と集団作業

1、勤労奉仕

昭和十三年（一九三八）四月一日、国家総動員法が公布されたのを契機に、学校教育の中に労働力として生徒を動員する「勤労奉仕」が取り入れられた。学校日誌によると、同年六月一〇日、福島町の出征軍人家庭へ田植への応援に全校生徒職員が参加したのが最初のようなのである。「勤労奉仕」はたちまち近隣の村々へ拡大されていった。また夏休み前の七月下旬から、御料林労力補給作業として、学年単位の集団作業が延べ六日間実施された。この年の九月には、全校職員生徒が慰問袋を百三十個も作って戦地の兵士に向けて発送する奉仕活動もあった。

一〇月に入ると今度は秋期勤労奉仕や集団作業が行われた。勤労奉仕の計画は、県経済部木曾出張所で統括し、実施計画が立てられた。従って木曾谷全体が網羅されて、春秋二回、七日から一〇日間ぐらいの動員が学校教育の中へ組み込まれた。昭和十三年を境に、中等教育はますますその性格をかえていくのである。

2、銃後の強力な戦力

昭和十五年（一九四〇）からは、道路修理作業や鉄道防備林の下刈り作業なども加わり、御料林下刈り作業は学校の夏期実習と一緒に枠組みがなされる等拡充された。同十六年八月、御料林の笹が結実した。食料不足を補う一助にと、早速一年生全員を一泊の採集作業に従事させた。また木曾高等女学校学有林の下刈り作業の応援も行い、さらに、十月から十一月にかけて郡下各町村で始まった桑園整理（蚕業統制法、農地開発法に基づく食料増産）作業にも、一、二年生が五日間従事する等、山林学校生徒は銃後の強力な戦力として活躍した。

五、学徒勤労動員

1、通年動員体制へ

政府は軍事訓練と勤労動員を徹底するため、昭和十八年（一九四三）六月「学徒戦時動員体制確立要綱」を閣議決定、翌年八月「学徒勤労令」を公布した。さらに同二〇年三月には、授業停止が閣議決定され、通年動員体制が強制された。ここに至って中等学校の教育体制は完全に破壊され、ひたすら統制のとれた労力として戦いの中に組み込まれてしまった。



写4-19 昭和19年の学徒動員 三岳村の発電所建設工事に行ったときの記念写真（42回生）。後方の小屋は宿舎

（当時助手の浜武人・41回・歳）

本校生徒は主に御料林での伐採された木材の集材、運材の作業、森林鉄道の線路の補修及び運転助手などの仕事、さらに木曾谷の発電所工事等に動員された。終戦の時、学校にはほんの少しの生徒がいたのみであったという。

2、北海道への援農隊

太平洋戦争の激化にともない、中等学校生徒の勤労動員もますます増大の一途をたどったが、その最たるものは何と云っても遠く北海道まで出かけた援農動員であろう。

昭和十八年（一九四三）三月二五日、文部省は全国の農業学校を対象とした「食糧増産農業学校報国隊北海道派遣二関スル件」を通達した。これにもとづき県下からも下高井農林、東筑摩農、丸子農商、小県蚕業、更級農、上伊那農、諏訪農、中野農商、上高井農、北佐久農、北安曇農、上水内農、南佐久農、中条農、赤穂農商、南安曇農、下伊那農等と共に本校も参加した。本校では昭和十八、九年の二回にわたり、二年生が派遣された。

3、釧路国川上郡標茶村へ

先ず昭和十八年九月から二カ月間、二年生四十五名が釧路国川上郡標茶村へ派遣された。同年九月一日付の北海道新聞に次

のような記事が載っている。

宮城、群馬、愛知、福島、長野などから、それぞれ数十名の生徒が、浜中村、標茶村、太田村、弟子屈村などの請入町村に入り、援農作業に従事することになった。木曾山林学校の生徒四五名は、渡辺操教諭引率のもと標茶村に入村した。

北海道新聞 昭和十九年九月一日

獲りの秋に戦ふ学徒部隊

初の報国農場入り

請入町村に萬全の通牒

【本報記者の現地入り】 報国隊の北海道派遣は、先づ釧路国川上郡標茶村に請入された。この村は、戦時下の食糧増産に重要な役割を担っている。報国隊の到着は、当地の農作業に大きな支えとなる。生徒たちは、厳しい環境の中で、食糧増産に貢献し、戦時下の苦境を乗り越える覚悟で活動する。この活動は、戦時下の教育の特色であり、若者の社会貢献の場となっている。

援農聖隊

雄く戦果を挙げ

【本報記者の現地入り】 報国隊の北海道派遣は、先づ釧路国川上郡標茶村に請入された。この村は、戦時下の食糧増産に重要な役割を担っている。報国隊の到着は、当地の農作業に大きな支えとなる。生徒たちは、厳しい環境の中で、食糧増産に貢献し、戦時下の苦境を乗り越える覚悟で活動する。この活動は、戦時下の教育の特色であり、若者の社会貢献の場となっている。

写4-20 北海道援農隊の到着を報じる『北海道新聞』（昭19・9・1）
（釧路公立大学の高嶋弘志教授提供）



写4-21 引率の渡辺教諭を囲んで
(有賀宏・42回・蔵)



写4-22 標茶村長より本校勤労奉仕隊に贈られた感謝状

この時参加した有賀(向山)宏(42回)は、小椋慶教(42回)と共に、ご主人が出征された農家に泊り込み、馬の放牧の手伝い、冬場の馬のえさにする茅を刈る仕事、カボチャや馬鈴薯の収穫作業などをした。その一方、熊に出会ったり鮭を取りにくいなど珍しい体験もした。食事はカボチャが多く、東京経由で帰宅したところ、家族から顔が黄色いと言われたという。

また帰るにあたって、標茶村の広瀬栄佐吉村長から木曾山林学校勤労奉仕隊に感謝状が贈られた。

4、十勝国河東郡音更村へ

続いて翌十九年の五月、二年生で実家の農業が忙しくない者や体に異常のない者、約九十名が渡辺操・黒河内健一の二教諭引率のもと十勝国河東郡音更村へ援農に派遣された。その時の様子を次に紹介する。

北海道援農記 音更村にて

四三回 今井弘幸

昭和十九年五月下旬から八月下旬まで、北海道へ援農に行くことになった。六〇年近くも昔のことで忘れ去ったことも多いが、記憶に残っていることを記してみる。

①音更村へ

昨年一級先輩の皆さんが標茶村へ行って大部えらかったという話を聞いていたので、自分達が行くことになったと聞いて一瞬いやな気もしたが仕方のないことである。健康診断をパスしなかった人を除いて九十名、リュックに下着と洗面用具をつめて盛大な見送りを受けて出発。五月二十三日だったと記憶している。発車して間もなく母校が見える。ふと「生きて帰って来れんかしらん」と思ったことが、今でも頭の中に浮かんでくる。列車は特別列車で日本海に沿って一路北上、青森から敵潜水艦の出没にビクつきながら青函連絡船で北海道へ。無事につきまた列車に乗る。札幌で道庁を表敬訪問し、一路帯広へ。二十五日夕刻着き一泊。翌二十六日いよいよ音更村へ向かう。帯広市から土幌線で音更村へ。役場で入村式を行う。援農する農家から出迎えに来てくれていた。二人一組になりそれぞれの家庭へ。私は宮嶋一君（下伊那出身）と二人で、田中家と西村家の二軒の援農することになり、西村繁松さんの馬車に乗る。西村さん宅へ着き、両家の家族を紹介してもらい、前半は田中家、後半は西村家へ宿泊し、仕事は一人ずつ十日間交代ですることを決める。さっそく田中さん宅へ案内してもらおう。「隣ですよ」と言われたが五百米近くも離れている。十勝平野の真っ只中で広いこと、広いこと。まわりは落葉松並木に囲まれた広大な畑ばかりである。

② 両家の紹介

田中家 父は出征中。

母、家事、農事のすべてを取り仕切っている。

長女小六、長男小四を始め下に二人の弟。

耳の不自由な作男一人。母さんを助けて実によく働いていた。私達二人が来たので急ににぎやかになる。母屋の横にある別棟に起居することになった。電気はなくランプ生活。油が貴重ということで点灯するのは夕食の時だけ。後は月明かりが頼り。文字通り太陽と共に生活しているといったところだ。

西村家の父繁松氏、がっちりした体格の、これぞ正に北海道の農夫の典型のような人。声も大きかった。

母、専業主婦。もっぱら家事をして農業には手を出さなかった。

兄、出征中、海軍へ行っているとか。

長女、次女、父を助けてもっぱら農事にいそしむ。

三女、絶世の美人。病弱で母とともに家事を手伝うくらいで、家でブラブラしている。

四女、私たちと同年で帯広の女学校へ通っていた。ふれあうことの一番少ない人であった。

西村家には電気がきていて電灯がついた。当時の北海道の農村では珍しいことであった。なお西村家では近くの駒場の牧場へ来る人達のために馬と人が宿泊する馬宿をしていた。

③ 援農アレコレ

広い農場

翌日は五月二十七日、いよいよ畑へ出て仕事である。日の出と共に起きて朝食。西村さん宅へ行く。今日は南瓜の種播をすると言う。畑まで約一キロメートル。馬車に乗って行く。広い畑に着く。広さ約一町歩。ここすべてに南瓜を播くと言われて肝をつぶす。百米四方もあろうかという広大な畑に、馬に鋤を引かせてタテヨコ三米間隔くらいの溝をつけ、その交点へ南瓜の種を播き、足で土を蹴飛ばして覆土していく。大農法はなんとも粗暴で荒っぽい。西村さんと二人の娘さんと私の四人で、午前中に終わったように思う。「学生さんの居る中に南瓜が収穫できるといいね、とてもおいしく栗みたいよ」と二人の娘さんに言われたが、八月下旬帰るまでには収穫に至らなかった。このあたりの專業農家は十五〜二十町歩の畑を持っているとのことで、一町歩の南瓜畑にびっくりした私には想像もできない広大な農地である。機械のなかった時代だったから、専ら馬を使って耕作していた。農器具の大部分は手作りのものだったと記憶している。

大豆播種

馬鈴薯はすでに播き付けられ成長を始めていた。それこそ一町歩近く栽培している。その隣へ大豆を播くという。どうやるのかと思ったら、木製の車の上に箱が付いていて、その中へ大豆を入れ、手押し車よろしく押すと車の回転に合わせて大豆が

穴から二・三粒落ちるようになっていた。鋤でつけた溝の中を、この車を押し歩きつつ足で覆土していく。何とうまい工夫の道具を考えたものだと感じた。立ったまま歩いていけば仕事になるので、これは楽しくおもしろかった。とうもろこしも同じやり方だった。その外にも、小麦、亜麻、てんさい（さとう大根）などを作っていたが、これらの農地へ播く肥料は専ら馬の厩肥であった。全面にばら播いてから鋤き込んで、後は溝をつけて種を播くというもので、金肥を使っていたかどうか覚えていないが、けっこうたくさん収穫があったところを見ると大地はとても肥沃であったと思われる。

馬小屋の清掃

西村さん宅でよくやったのが馬小屋の清掃である。馬宿をやっているので長い棟のなかに仕切られた小屋が一〇以上もある。一〇日間の中一〜二回はその清掃を言いつけられた。ペンと臭う悪臭と蠅に閑口しながら黙々と馬糞をかき出す。何ともやりきれない作業だったが文句も言えずにホークやスコップを振るう。一人で全部の馬小屋をやるわけじゃない。半日はかかった。さすがにくたぶれて休もうかと思っていたら「学生さん、おやつを作ったから食べてください」と絶世の美人、三女の八重子さんがお皿におやつを盛って持ってきてくださった。美人と二人きりになり、身の置き所のない私は、おやつのお味も覚えていないありさまで、いろいろの話をしたがすべて上の空

であった。

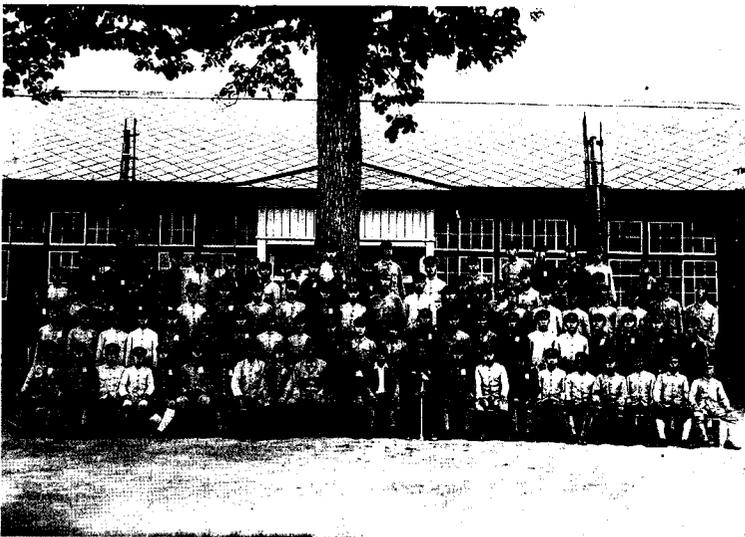
牧草刈り

最も重労働だったのが牧草刈りとその集積。八月になると牧草刈りが始まった。刃渡り三十センチ、柄の長さ二米近い大きい鎌で牧草を刈り倒していく。始めのうちこそ鎌も切れるし、バリバリという音も爽快で中二米程を先を競って前進また前進。しかしその中に腕の力もにぶり、太陽にじりじりと照りつけられて呼吸も乱れてくる。頃合いを見て「学生さん休みましょう」と長女の春子さんの声にヤレヤレとばかりに一休み。一休みといってもぼんやりしているわけではない。この時を利用して鎌を研がねばならない。水がないので自分のつばきをはきかけて研ぐ。「ポットに冷たいお茶が」という時代ではないので、飲まず食わずの半日と、午後は夕暮れまで刈っても刈っても、牧草地は終わらない。長い冬中の家畜の飼料だから仕方ないが、何日かかけてやっと終ってほっとしたら、今度は天日乾燥された牧草を集めて一ヶ所に積むという。藪の長さ五〜六十センチメートル、柄の長さ二・五メートルもあるうかという大きなフォークでかき集めた牧草の量は多大で、けっこうな重さになる。はしごがかけられてあるので、牧草を頭上に揚げて助走していったてはしごをとんとんと登り、上にいる人に牧草を渡す。上の人は上手に積み上げていく。こうして高さ四〜五米の丸い牧草の山が次から次へと出来上がる。雨の降らない八月はこう

しておいて、秋口になったら小屋へ収納するそうだ。

休みの日のこと

日曜日は休日だった。宮嶋君と二人で帯広へよく遊びに行つた。何をしたかあまり覚えていないが映画を見たり街中をぶらついた。大相撲一行が来るといので見に行った。照国



写4-23 音更村駒場国民学校にて援農隊全員の記念写真。昭和19年6月30日

(今井弘幸・三浦清一郎・43回・蔵)

という横綱がいて、ふつくらとした搗き立てのお餅のような白い肌で土俵入りした姿を今でも思い出す。

北海道にいる間に、二、三回、全員集合の声がかかった。別れ別れになっていた級友が一堂に会し無事を確かめ合い、農事の様子を話し合う。先生のお話やら若干の年事報告的なこともしたように覚えているが、何とも楽しい半日だった。

田中家の長男是宏君らと共によく音更川へ遊びに行った。秋になると鮭が遡上するというこの川はそんなに大きな川でなく、淵もなかったので水泳のできるような川ではなかった。魚をつかまえるべく川の中へ入ったが一匹もとれなかった。白茶けたような石があったので拾って割ってみると、なんとそれは黒曜石であった。大小さまざまの黒曜石が散在していた。上流から流れてきたので表面は磨滅して白っぽくなっているが、中はきれいなもので、貝がら状に割れ、するどい切り口を示していた。記念に一つ拾ってくればよかったと今でも思っている。

④さらば北海道。

長いと思った三カ月の援農生活も終り、八月下旬いよいよ帰ることになった。田中、西村の両家からよく働いてくれたと感謝され、「イナキビ」と呼ばれていたキビをリュック一杯もらい、饒別にと行って一円札を五枚ずついただいて帰路につく。帰心矢の如しで帰りの事は少しも覚えていない。

戦雲急をつけ、それから一年たたずの中に敗戦となった。

三ヶ月という北海道援農生活は、聞くラジオも、新聞も無く、しばし戦争のことを忘れさせ、太陽と共に起床し、終日畑に出で働き、豊かな食べ物に恵まれ、よき人々に囲まれた楽しい日々であった。暗くつらい戦時下の学校生活の中に咲いたたった一輪のアダ花のような、夢のような三ヶ月であった。

帰ってからも時々文通していたが、特に田中家の長男是宏君とは永く続き、先年北海道へ旅行した時、帯広に住む彼に電話し旧交を深めた。今でも年賀状だけは交換している。(了)

北海道へ二年生が援農に行っている時に、一、三年生はやはり勤労動員に狩り出されていた。関西電力の発電所工事に従事したり、帝室林野局御料林への動員であった。死と隣り合わせの危険な仕事に、折からの食糧事情の悪化もあり、育ち盛りの年頃の空腹を我慢しての連日であった。

六、痛ましい勤労学徒の犠牲

勤労動員に駆り出された生徒の中には、危険な仕事も引き受けざるを得なく、不幸にして、その犠牲になられた方々もいた。昭和二十年、終戦間近な六月と七月、本校からも二人の尊い犠牲者をだした。その方々の弔辞をもとにその時の様子を、それぞれ述べたい。

1、故伊原友廣君（43回）



写 4-24

故伊原友廣君は、新開村字熊沢（現、木曾福島町）に生まれた。昭和十八年四月、林業報国の志をたてて本校に入学した。

しかし、戦時中のことで、二年生の五月には食料増産のために、北海道援農隊として、帯広市近くの音更村に動員され、農業に従事、八月下旬に帰校。さらに同年十一月、木曾地方帝室林野局三殿出張所に学徒勤労報国隊員として、伐木、製炭事業や内燃機関車運転助手などの仕事に従事していたが、翌二十年五月十八日から、上松運輸出張所に配置転換された。

そこでは貨車制動の熟達により、森林鉄道運材列車の制動夫として軍用材、特に航空機材の搬出の任に当たっていた。

同年六月十二日は小川森林鉄道運材列車に乗務。午後二時五十分、北野停車場内において、貨車入れ替え作業中折からの降雨のため足元が滑り、貨車の間に転落して亡くなられた。

戦時中の物資不足のため履いていた地下足袋の底は薄くなり、よけいに滑りやすかったという。時に本校三年、享年十八才で

あつた。

葬儀は、翌十三日に自宅で行われ、本校々長渡辺勇、木曾地方帝室林野局長太宰哲一郎、同上松運輸出張所長小池金三郎（7回）らが、その御霊に弔辞をささげた。さらに神庭教諭をはじめ多くの教職員、級友らがその御霊を送った。

伊原君のお墓は、熊沢から幸沢へ抜ける道端にある伊原家の墓地にたてられている。

戒名は「精道友廣居士」とあり、墓石の左面には「学徒動員中殉職」と記されている。この道は、現在毎年行われる本校生徒の強歩大会のコースになっており、多くの後輩たちが通るところである。

戦争による痛ましい犠牲者の一人である。二カ月後には、終戦を迎えることを思うと、誠に残念なことであつた。

2、故臼井正好君（44回）



写 4-25

故臼井正好君は、岐阜県明智町から、五歳年上の姉、志喜子

さんに付き添われて、昭和十九年三月本校を受験し見事に合格した。

本校を志望した最大の理由は、同郷かつ同窓の先輩である伊藤良吉中尉(29回。昭和十四年一月、中国で戦死。享年二六才)を尊敬、慕って入学したという。

同年十月十二日、帝室林野局の王滝出張所に、学徒勤労報国隊員として動員され、翌二十年五月十九日、二年生の白井君は、三殿出張所の蘭(あろく)伐木事業所に配置転換された。

当時、同事業所では航空機製作材の搬出作業を行っていたが、白井君は、作業機敏なところから選ばれて、集材機の仕事を受けて持っていた。

同年七月三十日午後二時半ころ、集材機から木材を取り外す「トン卸」作業中、たまたま木材が変転、足元が滑り木材の間に転倒して左後頭部を強打し重体になった。その後の懸命な介護にもかかわらず、同日午後五時半に亡くなられた。享年十七才の若い命であった。

その晩は、現地でご両親、現場作業関係者等の他に同級生も集まり仮通夜が行われ、翌日、遺体は明智町の実家に無言の帰宅をした。

葬儀は、八月十一日に行われ、本校々長渡辺勇、木曾地方帝室林野局長太宰哲一郎、同三殿出張所長樋口徳一(10回)、さらに生徒代表石原東吾が参列し、弔辞をその御霊にささげた。

御霊を飾る祭壇正面には、故人を表すものとして木曾山林学

校の制帽が置かれ、しめやかに葬儀が行われたという。その戒名は「正山好学居士」、故人のお名前と山林学校を表す、「山」と「学」を組み込んだものであり、故人の母校に寄せた思いを偲ばせるものである。

これも戦争による痛ましい犠牲者である。しかも戦争の終わる、わずか半月ほど前のことであっただけに、伊原君同様誠に残念なことであった。

(付)故伊原友廣君・故白井正好君殉職のことは、それぞれ同級生である、三浦清一郎(43回)、石井拓男(44回)らの証言で判明した。ご遺族のお話では、戦後お二人とも、国から戦没者扱いを受けられたという。

母校の創立百周年記念に際し、お二方の御霊に改めて追悼の意を表したい。

七、校友会の改組と報国団・報国隊の編成

1、校友会の改組

創立以来校友会は職員、生徒で組織され、毎年の活動や動静を会報にまとめて卒業生にも伝えた。こうして卒業生と固く結びつき斯界に貢献してきた。

昭和十一年(一九三六)の校友会の組織は会長に高久常敬校

図4-12

造園	運動							文芸	庶務	部名
	スキー スケート	相撲	陸上	庭球	弓道	柔道	剣道			
重本先生				小藪井先生				百瀬先生	増田先生	部長
中島先生 百瀬先生 市川先生 神庭先生 宮原先生 小藪井先生	中島先生	渡辺先生	市川先生	渡辺先生	中島先生	重本先生	神庭先生	久木田先生	小藪井先生	職員委員
三輪喜内	手塚功	湯川澄雄	蔵部實	後藤静男	原田忠彦	安藤巖	三尾政彦	福岡一郎	加藤俊六	生徒委員
榎田貞治	稲越作郎	権成業	今井一男	小沢秀夫	川上弥惣太	久保弥助	内木繁一	宮下安雄	曾我藤男	二年
										一年
										三年
										二年
										一年

長、副会長に増田篤志教頭以下、(図4-12)の通りである。

この時代各部の活動は前述の通りめざましく、庭球部をはじめ年々の成果は枚挙にいとまがない。また『蘇門会報』は、林業研究にのみとどまらず、文芸作品・研究発表・論説など、会員の自由な意見発表の場となった。

さらに苗木・庭園樹木の生産や販売広告もたびたび掲載されており、校友会の幅広い活動が目につく。

木曾山林学校
生産の優良苗木

▲からまつ	▲あかまつ	▲くろまつ	▲たんだくり	▲小布施ぐり	▲さしはぐり	▲かしくみ	▲しなぐるみ	▲にせあかし	▲其他庭園樹として美しき「ねむのき」其他
▲からまつ	▲あかまつ	▲くろまつ	▲たんだくり	▲小布施ぐり	▲さしはぐり	▲かしくみ	▲しなぐるみ	▲にせあかし	▲其他庭園樹として美しき「ねむのき」其他

上記の苗木を以て各庭園に販売致します。何卒御座下下さい。
 ●御存心は三月末迄に届下ば御座候に依
 ●苗木販売は四月十日頃につき、それ以前に御入札の時は特に早届下候。

写4-26 このころ毎号『蘇門会報』に載った苗木販売の広告

2、報国団・報国隊の編成

昭和十六年(一九四一)八月、文部省は中等学校以上の学校に報国団編成を指示し、同年九月十日、本校も校友会を解散し、まったく性格の異なる報国団、報国隊を編成した。団長は石田恭吾校長である。太平洋戦争に突入する直前であり、軍隊さながらの組織化命令に学校当局の苦衷がしのばれる。

図 4-13 長野県木曾山林学校報国団（昭和16年） 団長石田恭吾校長

生活	学芸	国防訓練	鍛錬	総務	部
武藤教諭	丸山教諭	教練教師	重本教諭	理事 重本教諭	部長
購読指導 保健衛生		銃剣術 射撃	柔道 剣道 弓道 相撲 競技	庶務 企画 青木配属将校	班
木村教諭 武藤教諭		教練教師 教練教師	長浦教諭 白田教諭心得 重本教諭 白田教諭心得 神庭教諭	神庭教諭 重本教諭 木村教諭	班長
	亀山教諭		長浦教諭 渡辺助教諭 教練教諭 長浦教諭	松原教諭	係
中村勝男 下島末雄	田中邦男	原幸雄 山口茂	戸井秀次 各務正平 堀尾琢磨 奥村新吉 競技 砂山喜代司 球技 神野泛夫 庭球 加藤俱 スキー 霜鳥温	原幸雄 中口一雄	幹事

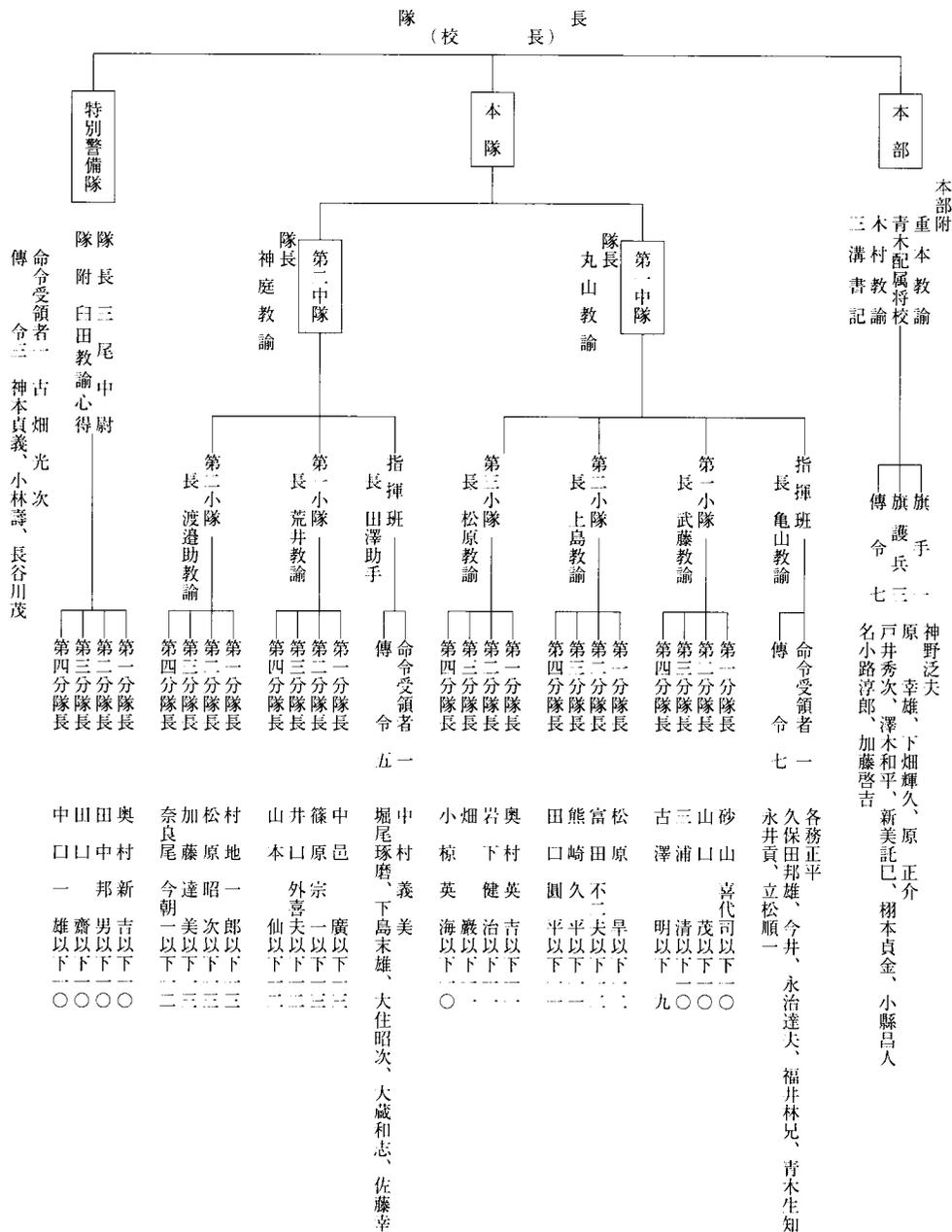
翌十七年には防空補助隊四分隊が加えられた。しかし『蘇門会報』は、同年一八五号まで従来と全く同じに発行されたが、報国団・隊の活動に関する記事はほとんどあげていない。また

英語の授業が続けられるなど、本校の教育及び職員・生徒の団結は、極限の事態の中でもゆるぎないものであった証と受け取れる。

長野県木曾山林学校報国隊

報国隊は報国団の時局即応の実際活動組織として生まれた。

図 4-14 長野県木曾山林学校報国隊編成 (昭和16年)



八、学校生活——明るく強く生きぬいた生徒たち——

1、紳士の卵たち

昭和六年（一九三一）九月に勃発した満州事変から昭和二〇年（一九四五）八月の敗戦に至る間を十五年戦争とも言う。

この長い戦いの間、生徒は優れた適応力と前向きな姿勢で団結を強め固い友情を育くんだ。

常に志は高く、遠く海外に勇飛する気概と純粋に国家のために盡す心情が溢れていた。

教室の中はいつも活気に満ちていた。上級、下級の区別は厳然としていて、時に上級生に厳しくしごかれ鍛えられたが、一般的にドライな雰囲気、陰湿な「いじめ」はなかった。

何事に当っても生徒は規律を守って迅速に行動した。修学旅行、登山、集団作業等、宿泊をとまなう行動でも引率の教師は二人ぐらいで十分であった。

学校長はじめ先生方は生徒を基本的に紳士の卵として教育された。大方の教師は生徒を「諸君」「君たち」「あなた方」と呼んで、温かく見守ってくれた。「非常時」という異常な時代に、生徒は山林健児として誇りを持って日常生活を送った。

2、一カ年の記録（昭和十三年の場合）

当時の学校生活の全貌を知るために、昭和十三年（一九三三）を例に、一年間の学校行事を追ってみた。

一カ年の記録（抄）（昭和十三年）

一月 一日 四方拝。新年拝賀式。

十四日 上松町長代理外二名上松町火災についての謝礼来校。

十六日 午後二時表校庭土留石垣崩壊約二間。

十七日 三学期始業式。

二二日 武道寒稽古開始。

二二日 出征部隊福島駅通過、職員生徒一同歓送。

二三日 黒川奥で兎狩り、生徒一〇〇名参加。

二七日 戦死者弔迎。

二八日 満蒙開拓義勇軍編成会議（木曾会館）校長出席

二月 一日 全校耐寒行軍（寢覚方面）

三日 キビヲ原にて全校スキー大会

十一日 紀元節の式後、全校で明治大帝御駐輦碑、忠魂碑、

水無神社へ行進参拝。

本日より一週間国民精神総動員第二回強調週間実施。

第一日 紀元節奉祝日。

十二日 第二日 自治訓練日（校内外の清掃、雪かき、荒神

社道路、境内の除雪、清掃）

十三日 第三日 生活改善の日。

十四日 第四日 産業報国の日。

十五日 第五日 資源愛護の日。帝林技手の林業講座（材木

造材）

十六日 第六日 心身鍛練の日。武道大会。帝林技手の林業

講話（測量）

十七日 第七日 皇軍感謝の日。帝林技手講話（測量）

十八日 防空準備訓練日、第一日。帝林技手林業講話

十九日 〃 第二日。

二十日 帝林技手林業講話。

二十一日 出征兵福島駅通過歓送。

二十二日 本日より四日間防空演習。

二十四日 第二回スキー大会（キビヲ原）

二十八日 木曾会館で木村知事、小野県会議長の講演、三年生

聴講。

三月 一日 三年生と福島在住卒業生との座談会。

四日 三年期末考查開始。

六日 地久節（皇后誕生日）

七日 福島駅通過待命帰郷兵出迎。

九日 陸軍記念日に關する軍事講話（配属将校荻中佐）

十日 陸軍記念日。帰還兵出迎後、水無神社、忠靈殿、忠

魂碑参拝。

十四日 第三五回卒業式。

十六日 一、二年生三学期々末考查開始。

二十二日 新開村の村葬参列（職員、一年生）。

二十六日 第三学期終業式。

二十七日 十三年度入学考查施行。本日より四月五日まで春期

休業。

二十九日 新入学者発表。

四月 六日 始業式。国語科担任百瀬先生告别式、後任袖山先生

新任式。新入学者第二次選考並びに発表。

七日 新開村木炭品評会（本校講堂にて） 県遠山技手の木

炭に關する講演あり、二・三年生聴講）

八日 入学式挙行（入学許可者五十二名）。

九日 春季実習開始。

十四日 渡辺先生出征につき午前十一時半壮行会。

十五日 渡辺先生出征、職員生徒一同歓送。

十七日 吉野林業学校生徒参観。本校、吉野林業、木曾中合

同道試合挙行。

十八日 出征兵歓送。

十九日 応召兵歓送。

二十六日 靖国神社臨時大祭につき訓話、遙拝、黙禱。式後忠

魂碑、忠靈殿、水無神社参拝行進。

二十七日 帰還部隊福島駅通過、全校歓送。

二十九日 天長節挙式。出征部隊歓送。

三十日 職員生徒身体検査。

五月 二日 出征部隊全校歓送。

三日 遺骨弔送。

四日 出征兵歓送。午後六時半より福島小学校で従軍記者

講演。生徒の聴講許可。

五日 出征兵歓送。

十日 一年出征兵歓送。二・三年生野外教練。

十一日 出征兵歓送。

十二日 木曾中柔道部選手来校、二年生と試合。

十五日 開校記念日。三年生関東地方へ修学旅行、重本・細

田両先生引率。

十六日 出征兵歓送。

二十日 徐州陥落。福島町・新開村提灯行列に職員生徒参加。

三十一日 一・二年生春期遠足会（キビヲ原・大原方面）。三

年生修学旅行より帰還。

二四日 二・三年生野外教練。

二五日

二七日 海軍記念日。校長講話。忠霊殿合祀祭に三年生参列。

二八日 出征兵歡送。午後校内庭球大会。

三十日 出征兵歡送。

六月 一日 各学年に毎週一時間宛、運動時間を加えることに決定し本日より施行。

四日 二学年本日より臨時考查

七日 全国農業学校長会議出席のため校長上京。

十日 福島町出征軍人家庭での田植えに対し、全校職員生徒勤勞奉仕。

十一日 三年生勤勞奉仕(日義村)

十四日 二年生 (原野)

十六日 中島先生砲片にて左關節負傷の報に接し、全校水無神社での祈願祭に参列。

十八日 県社会教育課、本校教練視察。

二十日 三年生勤勞奉仕(三岳村)。出征兵士歡送

二二日 国民精神総動員貯蓄週間、本日より一週間、校長訓話。

二四日 本校講堂において長坂清人氏(14回)の映写会、全校観覧。

二六日 明治大帝御駐輦紀念式に職員生徒参列。同記念奉祝相撲大会に参加。

二八日 出征兵歡送及び遺骨弔送。

二九日 遺骨弔送。午後相撲部選手の座談会あり。

三十日 負傷兵福島駅通過見送。

七月 二日 一・三年生勤勞奉仕(木祖村)。

四日 傷病兵見送

五日 一学期期末考查開始。連日の降雨で木曾川大洪水。

中央線不通となり南部通学生三十一名登校不能。校庭樹木数本倒る。

七日 支那事変(日中戦争)一周年記念日。正午全校黙禱、次いで新開村忠魂碑、福島町忠魂碑、忠霊殿、水無神社参拝、武運長久を祈る。

八日 出征兵歡送。卒業生坂巻利一氏(神坂村)の村葬に校長参列。福島町出征兵祈願祭に増田先生参列。

九日 チブス予防注射施行。

十一日 本日より夏季実習。支那事変一周年紀念勸語奉読式举行。

出征兵及び帰還兵歡送。

荒神社本祭に校長・職員・一年生参拝。

十四日 傷病兵見送及び遺骨弔送。

十五日 一年生野外教練(大原方面)。帰還兵歡送。

十八日 二年生勤勞奉仕(新開村)

二十日 二・三年生、三日間の予定で野外教練及び御嶽登山に出発。

二二日 一年生小川御料林にて集団実習(二日間)

二四日 二年生小川御料林にて集団実習(二日間)

二六日 三年生小川御料林にて集団実習(二日間)。傷病兵見送。

一年生駒ヶ岳登山。

二八日 集団実習終了式举行。本日より見習実習・家庭実習期間に入る。

八月 四日 本日より当分の間一般屋外灯火管制施行（東部防衛

司令部発表第四条規定による）

十九日 二学期始業式、校長より国民精神総動員経済戦強調週間に關する訓話あり。

二十日 出征兵歡送。

二十二日 午後七時より、生徒をして福島小学校における徳川義親侯の南支視察談を聴講せしむ。

二十六日 武道練習の為、本日より四十分授業。

九月 一日 震災記念日につき校長の訓話あり。木曾中柔道部選手来校試合を行ふ。

三日 第三学年について批評授業を行ひ、後批評会を開く。校庭において新開・開田村教育補充兵教練査閲施行せらる。

六日 午後七時より木曾會館において荻中佐の防空訓練に關する講演あり、職員生徒聴講。

八日 出征兵歡送及び傷病兵見送。木曾中庭球部選手来校練習試合を行ふ。

九日 県下男子中等学校第二部武道大会に出場のため武道選手出發、福島駅に全校歡送。

十二日 東部防衛司令部管下の防空演習、本日より五日間。木曾劇場における映画海軍爆撃隊及び東日ニュースの見学許可。

十四日 傷病兵見送。

十五日 満州移民少年義勇隊員の出發歡送。

十六日 秋季実習開始。

二十日 水無神社における石灯笼献納式及び武運長久祈願祭に職員生徒参列。

二二日 全校職員生徒の慰問袋百三十個發送。出征兵歡送。

二二日 遺骨弔送。県會議員郷土部隊慰問団通過見送。

二六日 木曾劇場における狩獵映画（本校演習林兎狩の実写）及び公会堂の^註開展覧会见学。三年生三村道雄君の葬儀に職員及び三年生参列。

二七日 出征兵歡送。

二八日 荻中佐告別式、山岸少尉新任式。式後荻中佐を全校駅に見送る。出征兵歡送。

二九日 出征兵歡送。

十月 一日 本日より冬服着用、午前九時七分始業、当分四十分授業。出征兵歡送。凱旋兵歡迎。三年生に帝林岩田技師の講演あり。

五日 本日より一週間、銃後後援週間。校長訓話及び一分間黙禱。

七日 教練査閲予行。山岸少尉歡迎会。

八日 三年生勤勞奉仕（新開村）。出征兵歡送、傷病兵出迎。

九日 三年生、日曜日なれど城山御料林にて帝林技師の指導の下に樹木識別実習を行ふ。出征兵高坂安雄君（卒業生）歡送。

十日 銃後後援強化週間第六日の行事として、全学年神社参拝及び清掃を行ふ。

十一日 本年度教練査閲好成绩裏に終了。査閲官第五十連隊長川田大佐。

十三日 戊申詔書御下賜記念日につき、詔書奉読式を行ふ。

十四日 土屋視学来校、授業參觀。

十五日 第二二回県農家懇談会に校長出席。傷病兵、遺骨通

過送迎

- 十八日 一年生勤勞奉仕（新開村）
十九日 靖国神社臨時大祭、午前十時十五分遙拝式挙行及び一分間黙禱。式後郡忠靈殿に全校参拝。午後福島町出身軍属の町葬に全校参列
二十日 一、二年生勤勞奉仕（三岳村）。三年生勤勞奉仕（上松町）。増田先生福島町慰靈祭に列席
二一日 出征兵歎送。
二二日 三年生、日義村御料において勞力補給作業をなす。
二四日 三年生右同。二年生三〇名勤勞奉仕（大桑村）。一年生遺骨弔送。
二五日 三年生右同。前日と同じ
二六日 武漢三鎮陥落祝賀式挙行、皇居遙拝及び一分間黙禱。県参事会員来校出納検査執行。
二七日 午後一時より漢口陥落祝賀行列に全校参加。夜町民の提灯行列に参加。定時会計検査。
二八日 二年生恩賜林集団作業。定時会計検査。
寄宿生、新開村の漢口陥落祝賀提灯行列に参加。
二九日 二年生前日に同じ。
三十日 日曜日、午前九時三十分、教育勅語奉読式挙行。校長訓話。
三一日 二年生恩賜林集団作業。
十二月 二日 遺骨弔送。
三日 明治節挙式、校長訓話。第七回日本体操祭参加（十時半から十一時）十一時より全校生徒マラソン競争。十二時半より全校職員生徒の慰労会食。
五日 秋季校内運動会。
- 六日 松本市に奉遷建立の長野県招魂社祀祭に校長参列。
七日 午前十時より全校福島小学校において宮下県議の戦地慰問談及び遠山大佐の実戦談聴講。
十日 国民精神作興詔書渙発記念日につき午前八時三十分より奉読式挙行。郡下中等学校青年学校合同演習に全校生徒参加。
十二日 正午帰還兵福島駅通過、二年生歎送。初雪降る。
十五日 二期期臨時考査開始。
十六日 学級増加に対する知事査定通過の旨信毎紙上に発表さる。
十九日 午後一時蘇門会幹事会開催。樋口、千村、吉川、佐藤四氏参集。
二五日 午後一時半より福島小学校における新愛知新聞特派員小池長氏の北支視察談聴講。
二六日 午前八時防空演習開始。午後四時傷病兵通過迎送。
二八日 午後二時遺骨弔送、三年生。午後六時出征部隊通過、寄宿舍生徒及び在町生徒歎送。
二九日 本日より教室にストープ。
三十日 新開村出征家族懇談会に校長出席。
十二月 三日 午前九時遺骨弔送、一年生。
六日 午前九時、午後零時十分、四時傷病兵通過、各回送迎。
十一日 午前十時水無神社における征矢五一君の祈願祭に増田教諭出席。午後九時松本連隊出征部隊歎送。校長須原村に出張。
十二日 出征兵見送り、一年生。
十四日 午前十一時、午後四時松本連隊出征部隊通過、全校

歡送。

十五日 經濟部出張所長来校。午後四時傷病兵通過迎送。

十六日 午後零時十分傷病兵通過迎送。

二三日 卒業生稲越作郎君(35回)の応召見送り、三年生。

卒業生安原直人君(33回)、山口五男君(35回)来校。

二十五日 第二学期終了式挙行。

『蘇門会報』第一八一・一八二号より抄出

3、服装

生徒の服装は「生徒心得」によった。昭和十六年の生徒心得には大略次の規定があった。

「生徒心得」細則

第三 服制

① 生徒ハ制服、制帽ヲ着用スヘシ。但シ止ムヲ得サル時ハ学
校長ニ届出テ、和服袴ヲ以テ代用スルコトヲ得、新ニ制服、
制帽ヲ調整セムトスルモノハ規定ニヨルヘシ。

② 制帽ハ色ハ茶褐色ニシテ生地ハ絨、又ハ布、型ハ陸軍略帽
トス

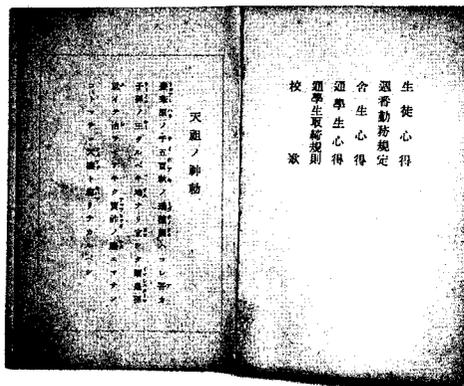
③ 制服ハ色ハ茶褐色ニシテ国民服乙字型、生地ハ更生織物小
倉織ノ類(商工省ノ規格品トス)

④ 外套ハ調整ヲ要セス、但調整セムトスルトキハ色ハ茶褐色、
型ハ規定ニヨリ生地ハ絨又ハ布トス

- ⑤ 六月一日ヨリ九月三〇日マデ夏服、其他、冬服ヲ着スヘシ
- ⑥ 脚絆ハ帯青色脚絆ヲ用フヘシ
- ⑦ 履物ハ靴、地下足袋トシ、下駄ヲ使用シ得ヘシ
- ⑧ 校舎内ハ指定ノ黒ツツク靴ヲ用フヘシ



写4-27 「生徒心得」を載せた『生徒必携』(半場重良・41回・蔵)



しかしながら、戦争の拡大と共に、上記の心得通りにする服装を整える事は困難となった。やがて代用繊維（スフ）服、地下足袋、巻脚絆といった兵士さながらの姿に変わっていった。

4、入学試験

入学試験は各校独自の方法で行ったので、本校も実態に対応した選抜を行ってきた。

昭和十二年（一九三七）には、三月二五日願書メ切、志願者一一名、三月二七日選抜考査、四月七日第二次選抜考査を経て、四月八日、五二名が入学式に臨んだ。

同十四年より二学級募集となった。三月二七日午前九時より入学考査、一三一名。三月二九日午前中、県外受験者第二次考査、午後五時合格発表となっている。

同十六年より選抜方針及びその方法が次のように変った。

三月二二日 入学考査第一日

校長訓話、身体検査、運動能力

検査……校医による。

二三日 入学考査第二日 口頭試問

二四日 入学考査第三日 口頭試問

二五日 入学考査第四日 口頭試問

二七日 午後四時合格発表

四月 九日 入学式

5、寄宿舎生活

大正元年（一九一二）、新開村（現、木曾福島町）杭の原に校舎が移転新築された。寄宿舎は木造二階建ての二棟を中心とした総建坪四二七坪であり、これは校舎本館を越える面積で、本校の一大特色であった。その時の舎生心得を見ると、「寄宿舎ハ生徒ノ品性ヲ陶冶シ共同自治ノ精神ヲ涵養シ、知能ヲ錬磨セシムルヲ以テ目的トス」とあり、以下寄宿舎編成、役員、学習、起臥、飲食、入浴、外出、帰省、疾病及診断、掃除、整頓、検査、不時点呼、学資金保管、出納、食費徴集、炊事、その他の十一項目にわたり詳細な規則を定めている。舎生は舎監の指導下、規律ある生活を送った。

①舎生の状況

昭和八年（一九三三）一月現在の舎生状況を見ると、次のようになっている。

一年生一五名

二年生一六名

三年生一三名

専修科 一名（計四十五名）

四十五名は、在校生総数の三四%を占めている。

② 在校生の出身地区別数

同年の在校生の出身地区別数をみると

〔県内〕西筑摩郡六七、東筑摩郡一、上伊那郡二、下伊那郡三、
諏訪郡三、南安曇郡三、北安曇郡二、更級郡一、
下高井郡二、上水内郡一、小県郡一、南佐久郡一、
松本市三、合計九〇名。

〔県外〕岐阜二六、愛知一、静岡一、茨城一、石川一、新潟三、
栃木一、福島一、山梨一、埼玉一、和歌山一、秋田一、
北海道一、朝鮮一、合計四一名。

③ 経費

一カ年の経費を見ると、昭和八年現在で次のようである。

〔経常費〕授業料 三九円六〇銭（専修科は二四円）

食費 八五円

舎費 四円八〇銭

その他（校友会費、旅行費、雑費等）

経常費合計

一年 一四〇円九〇銭

二年 一四二円四〇銭

三年 一五八円四〇銭

専修科 一一九円九〇銭

〔臨時費〕教科書、夏服、冬服、帽子、実習服、鈍、鎌、ゲー

トル、靴、文具、木工道具等々合せて

経常費・臨時費合計

一年 一九五円

二年 一六四円四〇銭

三年 一七八円四〇銭

専修科 一六二円

となっていて、食費と舎費を合せると八九円八〇銭となり、寄宿生の納入金額は通学生に比べ、一年生で二倍近く、二・三年生では二倍を超える。この外に小遣い銭は別途であり、家庭での経済的負担は大きいものがあつた。

当時の舎生活の一端を生徒の作文を要約して見てみよう。

寄宿舎生活 三年い組 園原欣二（40回）

午前六時、起床の鐘の音で日課が始まる。手早く床を片付け、直ちに廊下に整列する。朝の点呼である。「第一室総員六名、異常なし、終り」、ここまで十分とかからない。点呼が終るや、部屋、廊下の掃除、洗面。「お早よう」「お早よう」と元氣な挨拶。午前六時半朝食の振鈴で全員食堂に集合し、まず神棚を拝する。

ご飯は各室平等に分配。（従来は各自随意であつたが、食糧配給制度となり井で分配となった）全員姿勢を正し、眼を閉じ先生の発声にあわせて『箸をとるときに思えよ、天地御代の御

恵み。わが一方で食うと思うな、いただきます』と食事訓を奉唱して食べ始める。

一汁一菜、重いどんぶりがだんだん軽くなる。外米も七部搗きもよく噛んで食べ、十五分ぐらいで大体食べ終えたころ、先生の合図によって「箸を置くとき思えよ。天地御代の御恵み、祖先と親の恩を忘るな。御馳走様」の食事訓を唱へて食事は終わる。

始業二十分前に登校の鐘が鳴る。手早く整頓し登校。十二時の鐘で昼食、今日はライスカレーか天婦羅かと話し合いながら食堂へ急ぐ。

授業が終わり全員舎へ帰る。通学生は父母の所へ帰るが、舎生は親兄弟の待つていない舎室へ帰るので、このときは一抹の寂しさが湧いてくる。

帰舎しての掃除は、部屋、廊下はもちろん洗面所、娯楽室、ラジオ室、便所……と徹底してきれいにやる。

その後は今日の復習をする者、雑誌、新聞を読む者、校庭で運動する者と愉快に過ごす。

午後五時半夕食。激しい運動や勉強で腹はペコペコに空いていて実においしい。夕食後は点呼まで自由時間。

午後七時十分前に点呼の鐘が響く。室内に整列。戸棚はすべて開けひろげて、整頓状況を見せて点呼を受ける。それから直ちにラジオ室に集合し、七時のニュースを聴く。ニュースが終われば自室に入る。

この時間こそ勉強の骨組みとなる時間だ。一言もしゃべる者もなく水を打った静けさで先生も巡回される。

九時。自習時間終わり、九時半就寝。

土曜日は夜九時の点呼まで外出自由。日曜日は朝から夜七時まで自由時間、手紙を書く者、ピンポン、庭球、野球に興ずる者、洗濯、裁縫などする者あり。

午後三時、おやつが各室に配られる。これは週番お手製のパンで不恰好と味のよいのが自慢、この他に時々菓子配給に室員睦じく食べ、語り合ったり、ときには遠足や親睦会を開く。

〔蘇門会報〕一八五号（昭17）

昭和十四年（一九三四）一〇〇名募集となり、舎生も三学年合わせておよそ一〇〇名前後となった。青春時代の三カ年を「同じ釜の飯を食った仲間」として結ばれた友情は生徒の強いきずなとなった。また、立派な先輩の後について勉強に勤めた舎生は、総じて成績優秀で、常に学校の諸活動をリードしたといっても過言ではなかった。

寄宿生の連帯を深めたものに「寄宿舎の歌」がある。いずれも作者不詳であるが、歌詞のみ次に紹介する。

寄宿舎の歌 A

①緑したたる駒ヶ岳 清き流れの木曾の水 水に枕し山を負ひ



写4-28 同室の仲間と栗を食べながら談笑した楽しい時間 (浜武人・41回・蔵)

杭の原辺にそそりたつ 母校に並ぶ麓こそ たのし吾等が寄宿寮

② 燃ゆる希望を胸に持ち 彼の青雲を望みつつ
故郷遠く離れきて 山紫にたたなはる 秀麗の地に幾年の

思いを磨く寄宿寮

③ 黎明牙ゆる鐘の音は 儉安の夢破るなり 光栄と希望と憧憬
の 灯 高くかざしつつ 真理の道を究めゆく 理想に生く
る人や誰

④ 薨もとくる夏の日も 北斗の牙ゆる冬の夜も ともにいそ

しむ学びわざ 窓もる月を仰ぎては 若き血汐の高鳴りて
士気天地に溢るかな

⑤ 同じ理想に立てる児の まどいは久遠にかたければ、いく春
秋はめぐるとも いく夜の風は荒ぶとも 希望の光輝きて喜
び永遠につきざらん

寄宿舎の歌 B

① 駒の高嶺に雪映えて 春万象に光あり 流るる蘇水の色清
く 岸辺にほう藤の花 千秋変わらぬ寮閣に こもれる
理想誰か知る

② 秀麗ほこる御料林 五木の緑いや深く 小暗きほとりさまよ
へば 名のりてぞゆく時鳥 うつろいややすき若き日を
夢となすなと語るかな

③ 正気漲る霊峰の 秋霜冷ゆる明けの鐘 銀河をよぎる行雁
に 心は澄める熱血児 ゆくて遮る雲もなく 画くは使命の
旗標

④ 高峰雪に埋もれて 夕陽寒く輝けり 幽谷の気に鍛えたる健
児の守る学寮ぞ ともにいそしむ若人の 意気を永久に伝へ
てむ

6、高度で濃密な授業

昭和八年（一九三三）、第二代校長江畑猷之允は創立三十周年記念誌に次のような一文を寄せている。

「……学理の研修は勿論、実習に重きを置き、科外として珠算、文書の記案、細字の練習その他、官公吏、会社員として必要なる方面の教養に専念した。言い換ふれば、実業学校令と多少方向違いの官公吏、会社員養成を目標に邁進した。生徒も勿論其の氣風が横溢し、教諭と生徒の気分、心境が合体融合して而して英才教育主義で進んだが為に、教師も生徒も心を注ぎ神を凝し、習を積み、精を究め、異常の努力を惜しまなかった。

学業の程度も、高等専門学校程度以上を以って基準としたが為に、時々県当局の注意をうけたが断固として其主義は変えなかつた。加うるに、なんとといっても山水自然の風韻は不知不識の間に生徒を感化して、清標簡純而して瀟洒、淡泊、俗塵を脱し超然として高雅の趣を著し、氣骨愛すべく敬すべきものが多かった」

と述べた後、木曾時代の追憶が最も欣快であるとしている。

まさに山林学校教育の姿を要約明示したものであって、不幸にして戦時による変化を強いられたものの、その根幹はゆらぐことなく引き継がれ、すべての分野で高度で濃密な授業が展開された。

太平洋戦争たけなわの昭和十七年の授業時間割表を挙げると

次のようである。(図4-15)

時間割(第二学年一学期い組)

図4-15

土	金	木	水	火	月	
		木曜 講話	生徒 心得 発表	校歌 合唱	勅語 奉読	朝会
国語	物理	森林 数学	造林	造林	利用	1
数学 森林	化学	修身 (校長)	化学	鉱物	習字	2
教練	測量	教練	幾何	測量	代数	3
漢詩	珠算	教練	英語	農業	公民	4
実習	漢文	木工 実習	国語	公民	実習	5
実習	製図	木工 実習	教練	地理	実習	6
	製図	木工 実習	歴史	武道	実習	7

卒業生は、国の内外に広く進出して、ぼつぼつたる闘志で臨み、直ぐ役立つ有望な人材として高い評価を得て、「山林」の名声を高めた。これは後に続く生徒の誇りでもあった。

7、期末考査(試験)

生徒の頭を悩ませたのは言うまでもなく期末考査(試験)である。「あの先生はこんな問題を出す」「これは出そうだ、丸暗

記しよう」などと、考査が近づくと学級の中はもっぱらこんな話題に花が咲いた。

昭和十一・二年、各先生方が出された考査問題が残されている。考査には校名を印刷した成績考査用紙が使われ、考査問題は担当教諭より教務主任を得て学校長に報告する形がとられた。成績点の下方ボーダーラインは各教科とも、おおむね六〇%で、問題も今のようないく×式ではなく、すべてが記述式である。しかも五〇分の時間内に四〜五題、中には一題のものもあり、生徒は時間内に要点的に記述しなければならず、考査時間中は鉛筆の走る音がするのみで真剣そのものであった。

一年 造林 昭和十二年三月二三日 神庭 英

- 一、苗圃ノ位置ニツキ記セ。
- 二、十万本ノ山出苗ヲ生産セントス。苗圃約幾ヘクタールヲ要スルカ。
- 三、播付ノ方法ニツキ記セ。
- 四、播苗床ノ保護ニツキ記セ。
- 五、床替ノ効用ニツキ記セ。
- 六、床替上ノ注意事項ヲ列挙セヨ。

二年 造林 昭和十二年三月二〇日 神庭 英

- 一、枝打ノ課程ヲ問フ。
- 二、除伐トハ何シナ作業カ。

- 三、間伐ノ開始期ニツキ記セ。
- 四、樹型級別ニツキ記セ。
- 五、樹下植栽ノ必要ナル場合ヲ問フ。

三年 造林 昭和十二年三月五日 神庭 英

- 一、きりノ適地ト分根造林法ニツキ記セ。
- 二、まだけノ繁殖法ト手入ニツキ記セ。
- 三、潤葉樹用材林ノ造林上特ニ留意スベキ点ニツキ記セ。
- 四、我国林業ノ概況ヲ記セ。

二年 林数 昭和十一年十一月一八日 重本 勝

- 一、異齡林ノ林齡査定法一ツヲ述ベヨ。
- 二、次ノ測量結果ヨリ標準木直径ヲ計算セヨ。

図 4-16

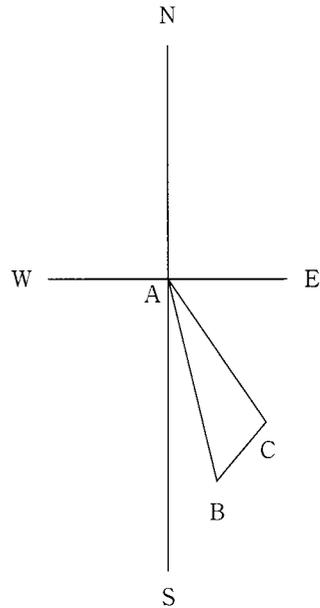
直径階地上1.2m (cm)	本数	断面積合計 (㎡)
24	60	2.714
25	63	3.093
26	41	2.177

三、次ノ意味ヲ問フ

- イ、毎木調査
- ロ、括約
- ハ、形状高

二年 測量 昭和十一年十一月十九 増田篤志

- 一、経緯儀ノ検定事項ヲ列挙セヨ。
- 二、次ノ図ニヨリ、経緯距差ノ総和ノ零ナルコトヲ証セヨ。



(以下略)

三年 経理 昭和十二年六月七日 重本 勝

- 一、厳正保続作業ニ就イテ詳述セヨ。

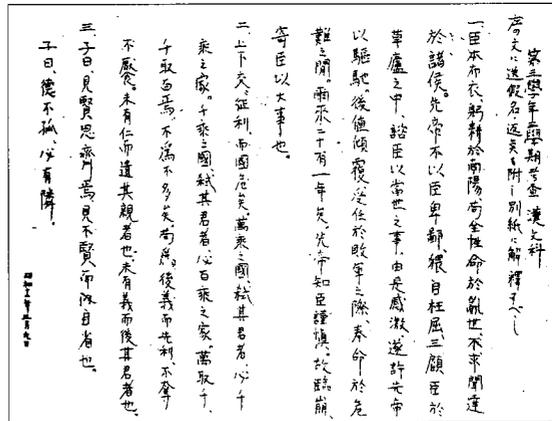
三年 土木 昭和十二年六月七日 増田篤志

- 一、視距測量ニオケル水平及垂直距離ノ算出方法ヲ述ベヨ。
- 二、曲路測量ニオケル偏角法ヲ例ヲ挙ゲテ説明セヨ。
- 三、最小半径算定公式ノ成立ヲ説明シ、其用法ヲ例ヲ挙ゲテ説明セヨ。

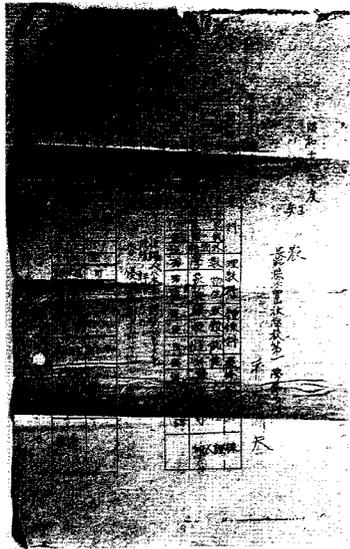
(以下略)

木工 昭和十一年十一月十一日 久木田 實

- 一、ベニヤノ乾燥法ヲ説明セヨ。



写4-29 第3学年3学期考查、漢文の問題



写4-30 昭和19年、印刷物の裏面を利用した通知表
(平田利夫・44回・蔵)

二、動物質膠ノ性質ヲ問フ。
 三、ガゼイン膠ト植物性膠トノ性質ヲ比較セヨ。

一年 化学 昭和十二年三月二日 小菌井 澄

一、二規定塩酸ヲ用イテ濃サ未知ノ苛性曹達溶液一〇〇ccヲ中和シタルニ塩酸二〇ccヲ費ヤシタ。コノ苛性曹達溶液ノ濃サヲ求メヨ。

二、次ノ金属ヲ空气中テ強熱スルトキノ化学変化ヲ述ベヨ。

鉛・マグネシウム・亜鉛・銀・銅・鉄・水銀

三、次ノイオンノ検出法ヲ述ベヨ。

Cu^{2+} Ag^{+} Fe^{2+} SO_4^{2-} Cl^{-}

(以下略)

二年 物理 昭和十一年十一月十八日 小菌井 澄

一、二三〇度ノ銅塊二一〇gヲ一〇度ノ水二〇〇g中ニ投ジタルニ、水ノ温度三〇度ニ上レリトイフ。銅ノ比熱ヲ求メヨ。
 (以下 略)

三年 三角法 昭和十二年三月九日 小菌井 澄

一、二角トソノ頂点間ノ辺トヲ知ツテ、三角形ヲ解ク方法ヲ記セ。

11° $\text{COS}^{-1} 0 + 2 \tan^{-1} \sqrt{3} - \text{Cosec}^{-1} 2$ ヲ計算セヨ

但シ各反三角函数ハ正ニシテ 90° ヨリ大ナラズ。

(以下略)

一年 代数 昭和十二年三月十九日 久木田 實

1、 $(\sqrt{3} + 3\sqrt{6} - 5) \sqrt{6}$ ヲ簡單ニセヨ。

2、 $\frac{2x^2}{x^2-1} + \frac{x}{x+1} = \frac{x}{x-1} + 3$ ヲ解ケ。

3、 $\frac{1}{x} - \frac{1}{y} = \frac{1}{30}$, $x - y + 8 = 0$ ヲ解ケ。

4、面積 84 cm^2 ノ矩形アリ、横ハ縦ヨリ 5 cm 短シト云フ。縦横ヲ求メヨ。
 (以下略)

8、繰上げ卒業と学徒出陣

①繰上げ卒業

昭和十六年(一九四一)十月、大学、専門学校学生修業年限短縮の勅令が出され、これに関連して本校も三カ月間の繰上げ卒業を余儀なくされた。十二月八日及び二十七日の「学校日誌(抄)」には次の記録が残されている。

十二月 八日 朝礼ノ際学校長ヨリ米英ト戦争開始ニツキ訓話。

宣戦布告ノ詔書渙発 午前十一時四十五分。三年繰

上(第一回)卒業、二年一年二学期考査時間割発表。

十二月二七日 午前十時、第三十九回卒業式挙行、知事代理官

来臨、武藤先生告別式。午後二時謝恩会。

『蘇門会報』一八五号（昭17）

こうして、第三九回生はあわただしい情勢の中で、学窓を後にした。本校では、次のように計三回にわたって繰上げ卒業が行われた。

昭和十六年十二月 三九回卒業生

同 十七年十二月 四〇回卒業生

同 十八年十二月 四一回卒業生

② 学徒出陣

いわゆる学徒出陣は、大学・高専在学生の徴兵適齢（二〇才）以上の者のうち、理科系・教員養成系以外の者の徴兵延期制度を撤廃して入隊させた措置をいう。

しかし、中等学校からも四年（本校の場合は二年）修了者が海軍予科練習生等に志願入隊することができた。

本校からも学業半ばで、祖国に殉ずる純粋な精神と、遅かれ早かれ征かねばならぬ宿命を胸に、軍隊に志願入隊する生徒が相次いだ。

殊に、海軍甲種飛行予科練習生（予科練）に集中し、身体強健、学力優秀な生徒が次々と志願した。前述有賀宏著『若き生命』に、その模様が次のように描かれている。

（略）ある日、帽子を取った三尾中尉が廊下の掲示板へ一枚のポスターを、画鋏で留めたあと、銃器室へと去って行った。

「七つ釘の予科練、スマートだなあ」

教科書を座布団で包み、左腕へ抱えている舎生の声であった。「戦闘機に搭乗する飛行兵姿の方が男らしいぞ」

柔道着の帯で教科書を十文字に縛って肩にかついでいる通学生と、カバンを尻までたらし掛けている生徒たちは、思い思いにポスターを見て話していた。

「甲種飛行予科練習生の志願規則、年齢十六歳から二十歳。中等学校四年年の第一期卒業程度になっているぞ」

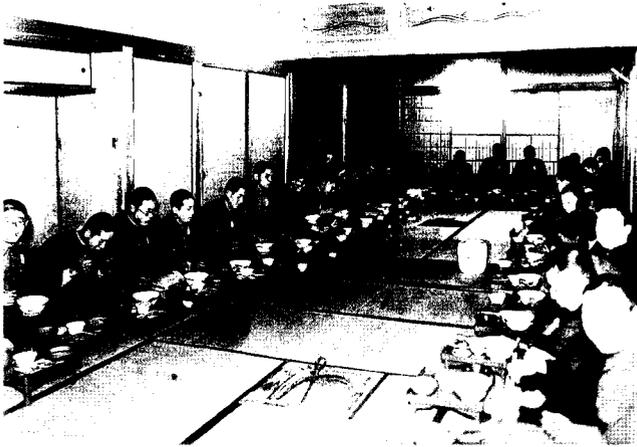
「受験場所、第一次試験は松本市か」
「申し込み期限、十月末日だ」

汽車通いの生徒や、舎生たちが掲示板の前を入れ替り、足を止めては帰っていった。

清人は、舎生の後に立ち、ポスターに印刷されている字を書き写して、寄宿舎へ帰った。しかし受験する決意の定まらぬまま、日は過ぎていった。

海軍飛行予科練習生を受験する気持ちが胸の底から沸いては消え去る。そのたびごとに決まって頭に浮かんでくるのは、父母の顔であった。今日まで学校へ進学させてくれた父母の気持ち、わかればわかるほど、志願を止めるべきだと考えた。

あと一年後は卒業になる。就職を考えて勉強をしなければと思う気持ちと、男は、二十歳で徴兵検査を受けて、健康な者は



写4-31 甲種飛行予科練習生送別会 いわやにて
(古川彦次・41回・蔵)

皆軍隊へ行くとすれば早い方がよい。そう思うといたたまれない感情が沸き、三尾中尉の張った「大空へ若者よ来たれ」の写真、受験申込期日が、清人の頭から消える日はなかった。

(中略) 土浦海軍航空隊へ入隊する清人は、クラス全員で寄せ書きをしてくれた日の丸を肩にかけ、校門で記念撮影をした。

校門から玄関まで、中央通路の両側にツツジと玉イブキを交互に植え込んだ校庭に、同窓生全員がゲートルを巻き整列していた。(中略) 清人は、その学校に感謝し、学んだ御礼をこめ

て、玄関に送りに出た諸先生に最後の敬礼をした。その後、校庭に整列して見送る中央通路を歩いて校門前まで来た。そして腰の軍刀を手に上げた長靴姿の三尾教官の指揮で、全員が見本樹木園の中にある奉安殿の方向へ向きを変えた。

「脱帽、奉安殿に対し、最敬礼」

三尾教官のすき透った号令に従い、全校生徒が全身を九十度前へ深く折り曲げた。

「一同、なおれ」

背広姿の担任、丸山先生が三尾教官と耳打ちをしていた。やがてその担任が中央へ進み、タクトを振った。

海行かば、水漬く屍 山行かば、草むす屍

全校生徒が不動の姿勢であった。(後略)

『若き生命』 有賀宏著

九、本校への疎開

1、工場と化した母校

終戦直前及び直後に、学校を訪れた生徒達が目にした本校は、講堂の床がはがされ、旋盤のような機械が据え付けられていた姿である。戦時下、本校までも疎開工場として使われたのである。

この時に工場疎開した大同製鋼(株)の社史『大同製鋼五〇

年史』(昭42年)によれば、次のようである。

同社の主力工場である名古屋の築地工場は、昭和十九年十二月、初めて米軍の空襲を受け、物的損害だけでなく、重軽傷者十八人を出す大きな被害を受けた。

さらにそれと前後して大きな地震(十二月東南海地震、翌年一月三河地震)に見舞われ、大きな痛手を受けていた。

その後も空襲を受ける中で疎開計画が練られ、同二十年四月一日、軍の正式命令を受けて実施された。

同社築地工場だけでも、長野、大分、岐阜、三重、愛知県下の七カ所に分かれて疎開する大規模なものであった。県内では、本校がその候補地選ばれた。

工場化した本校には、金型加工機械類五十九台等が据え付けられ、同工場の航空機の発動機部品製造に関する金型彫設備の全てが疎開してきた。

そして同社の木曾山林工場(秘匿名、皇国第三七五三工場)として、同年七月末までには操業開始にこぎつけた。生産能力は月産百トンであったが、八月十五日、終戦と同時にその操業を中止した。

2、東京大学林学科の本校への疎開

昭和二〇年(一九四五)三月九日の深夜、アメリカのB29爆撃機の大編隊が、低空飛行で東京上空に侵入し、一〇日の午前

二時にかけて、夜間爆撃を繰り返し、本所深川、浅草など下町四〇平方キロを焼きつくした。

本郷にある東京大学でも備品・資料等の焼失を恐れて地方へ疎開せざるをえなくなった。その模様を、当時この疎開を担当した林大九郎氏(東京教育大名誉教授・農博)の話によれば、次のようである。

当時農学部林学科は、林業専修と林産専修とに分かれていた。林産関係については、戦時の航空機材料にかかわる木材、特に接着剤による積層材(強化木)の物理的・化学的性質の試験等を行っていた。どのような理由で疎開先が決まったか明らかではないが、林業関係のものは山形県へ、林産関係のものは、木曾山林学校へ疎開することになった。木曾山林学校への疎開は文部教官の北原覚一氏(高遠町出身・後、東大教授)が責任者となり、実務は東大を卒業してまもない大学院特別研究生の林大九郎氏が行った。

三月一〇日の大空襲を契機に、林氏を中心に荷造りは急ピッチで進められた。木材試験機は分解し部品としてまとめ、書籍、化学薬品とともに、貨物列車で飯田橋駅より中央線経由で木曾福島駅まで輸送した。同駅では北原覚一氏が荷受けを行い、それらを木曾山林学校の一室に置いた。その後、四月、五月と続く東京空襲によって、林氏はたびたび東京へ戻らなければならぬことができなかった。

林氏は「校長先生に挨拶に向いたが、校舎内に生徒は、少なくて寂しい感じがした」と当時を振り返る。

しかし終戦とともに、この疎開も終わり、九月には東京に戻った。このように約半年間の疎開ではあったが、戦禍を逃れ

たこれら貴重な機材・資料等は再び研究活動に使うことができようになった。

もちろんその研究成果が、戦後の我が国林産業発展に寄与したことはいうまでもない。

●コラム 黒川渡ダムのこと

『福島町史』によれば、「昭和十四年六月二日、木曾川電力会社の日義、城山両発電所工事完成。午後新開村黒川渡にて、竣工式を行う」とある。

黒川渡ダム造成工事は、人力中心の工事で大勢の人々が働いた。黒川渡橋は一段高く架け替えられ、桜並木はすべて消えて堰堤に変わった。地固めの胴突き唄が威勢よく流れたのも、この頃が最後になったであろう。

黒川の流れを分水して水車を回し、蕎麦をうった名代「くるまや」も福島町八沢に移転、魚類孵化場も川上へ移転した。また湛水によって、かつて松島と呼ばれた一帯は水底に消えた。

しかし本校前面に出現した大きなダム湖は、水泳など生徒たちに新たな活動の場を提供した。さらにこの湖面は、戦後、全面改築された近代的な校舎を映し出し、山々の緑とともに、本校ならではの美しい安らぎのある景観を演出することになった。第三部「思い出の記」、田屋幸男（36回）、宮下勝三郎（37回）参照。



写4-32 ダム湖出現前の景観（木曾福島町『飛躍のあしあと』）

第六節 このころの先生方

一、職員構成

この苦難の時代に本校の職員は、昭和八年時を例にとると、次のように校長を含めて十九名いた。()内は原籍

校長	高久常敬(栃木県)	修身
教諭	増田篤志(福井県)	幾何、森林土木、測量、製図、実習
教諭兼舎監	小菌井澄(茨城県)	公民、代数、三角、物理、化学、実験
同 兼舎監	久木田實(鹿児島県)	公民、図画、森林利用、木工
教諭	重本 勝(山口県)	植物、動物、鉱物、生理、森林数学、経理、実習
同	宮原次一(長野県)	英語、歴史、地理
同	神庭 英(鳥根県)	造林、保護、利用、林産、実習
同	市川 清(長野県)	化学、理化、農学、農林、実習
助教諭	宗村新藏(秋田県)	木工実習
教諭心得兼舎監、心得		

同	大竹亀次郎(長野県)	国語、漢文、習字、弓道
同	中嶋豊作()	体操、教練
同	若林勝衛()	柔道
教授嘱託	福島朋末()	剣道
同	亀子広風()	弓道
実習教師	渡邊 操(山梨県)	木工実習
書記兼嘱託	三溝蒼之(長野県)	珠算
林業助手	長谷川竹治()	実習
学校医	杉本聞吉()	
配属将校	原 宗辰(東京府)	教練

『蘇門会報』七号(昭8)

もちろん人事異動があるので、職員も入れ替わりがあつたが、こうしてみると生徒のみならず職員も他県出身者の多いことがわかる。

二、思い出の先生方を偲ぶ

増田先生を偲んで

三八回 田沢兵司

先生は、平成十一年九月に、百五歳の超ご高齢にて大往生をされたとのこと、年末喪中の挨拶状で伺いました。心からご冥

福をお祈り申し上げます。

平成二年の夏、大阪で開催された「花の博覧会」の折、茨城市にお住まいだった先生を訪ねました。前年奥様を亡くされ、ご子息の光男様ご夫妻と暮らされておりました。

この時九十五歳顔色もよく、矍鑠かくやくとされておりました。「先生長生きの秘訣は何ですか。」と尋ねたところ、「それは君、食物をよく噛むことだよ。」とのことでした。

日常は水墨画を楽しみ、雅号を「蘇水」といい、木曾に思いをはせておられるとのことでした。医者が先生の描かれた水墨画を見て、「先生はまだ若い、筆を持つ手にふるえが見当たらない」と言われている、と笑っておられた。

われわれ三十八回生の一人一人についても在校時の思い出を正確に覚えておられ、記憶の確かさにびっくりしました。

昭和十三年四月木曾山林学校に入学して、先生の教えを受けることになりました。

幾何の時間、先生は教壇に上り、今日の項目を述べるや否や、「これについて、誰かやってみた」と大きな声で言われる。手をあげると「君やってみた」、黒板の前に立つ、指先がふるえながら、何とか答えを書く、終わると「説明してみた」とくる。

この調子が繰り返えされ追突される。宿題はすっかりやっこないと怖い。予習もほどほどにやらないとどうにもなりませんでした。「幾何」しかり、「製図」しかり、測量は外業はもとより、内業の計算、製図にいたるまで、きめ細かに鍛えられま

した。

怠け心が出て、組全体がたるんできると思われるときは大変だった。

「君達の先輩の勉強ぶりはすごかった。君達のようなだらしのないものは一人もいなかった。このままでは社会に出ても使いものにならない。」

「最近、吉野林業学校や熊野林業学校の卒業生と本校の卒業生の間には、待遇の格差が生じているという。実力が低下したから使う側も差をつけているのだ。なさけないことだ。しっかりとやらないと置いていかれる。」

また「普通科の中学生を見たまえ。中学の四・五年生ともなれば、皆上級校をめざして、命懸けの気持ちでやっている。君達は努力が不足している。努力こそ、今後の源泉である。しっかりとやりたまえ。」骨身にしみる一瞬であった。心の底からのやる気呼びおこされた。

授業時間中、本題からそれて脱線することもあった。先生は北大の実科を卒業後、福井県庁、空知農林学校などに勤務された。この時の社会体験を話された。

「酒はほどほどにたしなめよ。人とおつきあい、対人関係でなくてはならないものだ。」

「酒量のほどほどは健康にもよい。」

「それに反して、煙草はダメだ。」

「体に悪い。煙草の味を知るとやめようにもやめられない。」

やめるのには並大抵のことではない。「初めから吸わないほうがよい。」など、今後の人生に対する生き方をよく話された。

先輩の活躍振りについても、例をあげて紹介された。後輩として後に続く気がまえが、腹の底から湧きでる思いがした。

教室での授業はもとより。演習林での測量実習、測量後のまとめ、内業の計算・製図など「やってみた。」の号令に皆真剣にとりくんだ、成果を見て「これなら、高農や大学にも負けないうぞ、よくやった」と言われたときは、ほっとし、天にも上る気持ちでもあった。

このように増田先生から三年間にわたって教えを受けた。

先生は三十八回生が卒業した十六年三月に、吉野林業学校の校長として木曾山林学校を去られた。

私はその後高農で学び、軍隊で幹部候補生隊を体験し、さらに社会生活を過ごしてきましたが、節目、節目の曲がり角では、先生の顔が思い出されました。

「絶えざる努力」「実行する力」「健康に留意」「気力の充実」などが頭をよぎりました。先生の思い出はつきることがありません。

先輩と母校を語るとき、必ず話題になるのは、増田先生に鍛えられたこと。「ライオン」のあだ名のとおり、熱血的にほえて、生徒を鍛えたことでした。これが皆の力となって実力向上の力になったと思います。心から感謝申し上げる次第です。

終りになりましたが、増田先生は、明治二十七年に福井市で

生れ、中学生の頃の流行病で両親が他界され、近所の同級生も六人中四人までが亡くなられ、祖母に育てられた由。体が弱く、健康には留意したとのこと。その後北大の実科に学び、卒業後、郷里の福井県庁に就職。施業案編成係りで市町村・部落有林の測量・製図を専門にやった由。その後、北海道の空知農林学校に転じ、大正のなかば頃に木曾山林学校に転校され、昭和十六年三月、吉野林業学校長になられるまで、二十数年にわたって在校されました。奈良県の田原本学校々長を最後に退職されたと伺っております。晩年は大阪府の茨木市に長男の光男さんのご家族とご一緒に過ごされました。

(了)

重本 勝 先生のこと

四一回 古川彦次

先生には昭和十六年四月入学以来、十八年十二月の卒業までクラス担任として様々なご指導をいただいた。

先生は謹厳、温容そのもので犯し難い気品があり、とかく生意気ざかりの生徒も先生の前では神妙な振舞いに終始したものであった。当時の先生方は生徒を紳士の卵として指導して下さったと思うが、殊に重本先生の言葉に思い出は多い。

「君ソレハイカナイ、以後改メタマエ。」

と言った一言の注意で平伏したものである。

森林経理など先生の講義は、時にはドイツ語まで入って、ま

さに旧制高専レベルの名講義であった。又、植物学にくわしく、神庭先生と共に演習林の草木に精通されていたこと等、次々と思い浮かんでくる。先生は教科書や辞書などを書物と呼んで日常大切に扱うように訓され、本を丸めて持ったりアンダーラインでも引けば「書物ニソノヨウナコトヲシテハイカナイ」と言われた。不肖の私もこのことだけは多少身についたように思う。私共が卒業した後、先生は京都府立大学の教授となられ、定年後府立女子短期大学長などもつとめられた。

昭和三十一年春、私は母校の教師として転勤してきた。当時は毎年一月十五日に近畿蘇門会総会が大阪市で開催され、私は本会事務局担当として何回か参加させていただいた。

総会には必ず増田、重本、神庭の三先生が出席された。まさに近畿支部総会の一大特色であって、先生の薫陶を受けた卒業生が多く集まり、それは盛大であった。

重本先生は私が木曾山林に勤めるようになった事を大変喜ばれたので、この時ばかりはいささか面目の立った気分になったのであるが、お別れに際し「ドウカ一日一日ヲ大切ニサレテ頑張ッテ下サイ」と言われた。以降昭和四十八年までの間、何回もお目にかかれたが、別れの際には必ず一日一日を大切にせよと言われ、私の脳裏に焼きついた。

昭和五十七年一月、私は母校へ再び戻って近畿蘇門会に出席し、久し振りに先生にお目にかかることが出来た。会が終了して別れるに際し、先生は以前と少しも変わらず「ドウゾ一日一

日ヲ大切ニゴ精進クダサイ」と言われて握手して下さった。

古希をとうに過ぎた私に残された歳月は極く少ない。それなのに先生の教訓は、未だほとんど守られていない。既に亡くなられた先生を偲ぶとき、世の無常と共に何処か悔いの残る気持ちを捨てきれない。

(了)

先生方に対する思い出は、後掲第二部「思い出の記」の中にもあるので、併せて見ていただきたい。